

ニセコイ ～転生者の軌跡～

猫の休日

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ニセコイの世界に、一人の男が転生した。

前世の記憶を思いだすきっかけとなったのは、一人の男の名。

その男に拾われ、ヒットマンとなった男の、人生を記した物語。

※初投稿、処女作です。あらすじ書くの苦手なんで、ちよつとでも興味を持っていたら、暇潰し程度の感覚で読んでみてください。スマホからの投稿なので、読みづらいかも知れませんがご了承ください。

まだ機能も全然把握できてないので、読みにくかったらごめんなさい。

目次

プロローグ	1
1話 目覚め、そしてー	15
オリ主設定	26
第2話 原作開始	29
第3話 決闘	38
第4話 決闘2	58
第5話 決闘3	68
第6話	78
第7話	84
第8話 林間学校	95
第9話 林間学校2	105
第10話 林間学校3	113

第1話 林間学校4	122
第2話 それぞれの	130
第3話 銃声と血	139
第4話 目は口ほどに	147

プロローグ

目の前を、たくさんの車が走る。

その様子を、ボロボロの薄汚れた服を着た、まだ年端もいかぬ少年と少女が、これまたボロボロの布を手にとって眺めていた。

信号が、赤に変わる。

その瞬間、少年と少女は自分達から一番近い車目掛けて駆けていき、目敏く車に付いた土を見つけると、その薄汚れた布で丁寧拭く。

車の運転手は、その行為に不快そうな顔をしつつも、窓を開けそこから二東三文にすらならないはした金を放り投げた。

チリンチリンと、お金が地面を跳ねる。

少女が素早く跳ねたお金を追いかけてそれを拾うと、すぐさま少年が少女の手を取り、走ってその場をあとにした。

時期に信号は青になり、車が再び走り出す。まだ道路の周辺には、似たような格好をした子供たちが、走り去った少年と少女の方角を、羨ましそうに眺めていた。

走って走って、走って。いくつもの角を曲がりどんどん人気のない方へと走ってい

く。少年は時々振り返っては、後ろをつけてくるライバルたちがいないかを確認しつつ、走り続けた。

そうして、ようやく目的地に付いた。

二人しか知らない、秘密の隠れ家。

路地裏の路地裏、さらに奥まって人が立ち寄らない、さらにまた奥。そこに、その辺に落ちていそうなボロボロの木や布で作られた、小さなテントがあった。

少年が何日もかけて材料を拾ってきたは、何日もかけて作り上げた、二人の家であった。

少女は乱れた息を整えつつ、ゆっくりと家の中へ入っていく。少年はそれを確認すると、一度角まで戻って、つけられていないかの最終確認で、薄暗い道を気配を消し、物陰に隠れながらしばし道を監視し、つけられていないと分かると小さく息を吐き、少年も家へと入っていった。

ここがどこの国で、何ていう町なのかは知らない。しかし、二人にとってそれが世界のすべてであった。

親に捨てられた。親が死んだ。そもそも、親の顔すら知らない、そんな子供たちの世界。

物を乞い、盗み、薬を売り、体を売り、騙し欺き、裏切り見捨てて、そして暴力で奪う。それが、二人の世界、そのものだった。

「おい、お金ちゃんと持ってるか？」

少年の間に、少女は小さく頷くとポケットから先程拾ったお金を手渡した。

「……はい」

少年は黙ってお金を受けとると、テントの奥へと行き、奥に隠してあった小さなジュースの缶を引っ張り出しては、それをひっくり返した。

チリンチリンと、中からいくつかのお金が落ちてくる。

「……足りる？」

少女のその間に、少年は力なく、小さく首をふった。

「……全然、足りない」

「……そう」

「……ああ。パンの1つも…買えない」

「……お腹、空いた」

少女の弱々しい声に、少年は歯を食い縛る。

もう、何日前に物を口に入れたのかすら、分からない。

「……待ってろ」

少年はそれだけ言うと、フラフラとしながらも、しかし確かな足取りで外に出た。

「いつてらっしやい」

少女のか細い声を、その背に受けながら。

少年は今、市場に来ていた。

目的はいくつかあるが、そのうちの1つは盗み。今フラフラと歩きながら人混みのなかを縫うように進む。

そして、自然な流れで店の端までたどり着いては、すつとリングを盗った……のだが。

「おい店員さん！ こいつリング盗ったぞー！」

その声が聞こえた瞬間、少年は弾けたようにその場所を飛び出し――その手を、誰かにとられて捕まえられた。

「離せ！ 離せ！」

「うるせえんだよ！ このクソガキが！」

少年はそのまま店の前まで連れていかれると、店の人や近くにいた大人の男性に、殴られ、蹴られ、ただひたすらに暴力を受けた。

流石の大人たちも、盗人が年端もいかぬ少年とあつて手加減はしているようだが、そ

れは同情などからくるそれではなく、単に暴力で死んでしまったら、自分達が捕まるかもしれないという考えから来るものであった。

ある程度暴力を受けると、大人たちは少年を解放する。

少年はしばらくそのまま動けずにいたが、時間が経つとのそりと起き上がり、あちこちから血を流しながら歩いた。

こうなると、もう盗みはできない。怪我の問題もあるが、それ以上に人目を集めすぎしてしまうため、まず盗み事態が困難で、そして逃げられないからだ。

祈るのは、同情などで道行く人がくれる、お金やパン、水だ。

狙うはこの国の人じゃない人達。そういう人達は、同情などでくれることが、たまにある。

……が、今回は失敗だった。

この国の人ではない人は見つけた。しかし彼等は、少年を見つけるとニヤニヤと笑いだし、近づいてきたと思つたら腹を蹴られた。

何にもない胃から、胃液を吐き出す。

「……………」

「……………」

何をいつているのか分からなかったが、彼等は楽しそうに笑いながら、少年を一瞥す

ると、少年に背を向け歩き出す。

睨み付けるように視線を向けると、少年の目に財布が見えた。

ズボンの後ろポケットに入れられている、大きな財布。

少年はそのそりと起き上がり、気配をできるだけ消して、彼らの後をついていきゆつくりと距離を積める。

そして、人通りが一番多い通りまでいくと、するりと、その財布をスツた。

誰も、少年に気づく者はいなかった。

少年はその手に、小さなパン1つと水の入った小さなペットボトルを1つもって、家に帰ってきた。

これらは財布に入っていたお札で買ったものだ。

本来ならもつと買えるだけの金額があつたのだが、少年は小銭でしかお金の価値が分からないため、騙しとられたことに気づかない。

家に帰ると、少女が寝転んでいた。

寝ていると思った少年は、パンと水を少女にあげようと、ゆつくりと揺らして起こす。しかし、少女は起きなかつた。

その体は、明らかに冷たくなつていて。

慌てて少女はパンをちぎっては、少女の口にパンを入れよえとして……パンがこぼれる。

「……おい、食べよ。兄ちゃんがパンと水を持ってきたんだぞ。久し振りのご飯だぞ」
しかし、少女はピクリとも動かない。

少年はその目から涙を溢れさつつも必死に声を押さえながら、パンを口に運ぶ。

ここで声を出してしまうと、認めてしまうことになる。

「おい、食えつて。食ってくれ。頼む、お願いだから、俺は要らないから、これは全部お前のだから……だから、なあ！」

それでも落ちたパンを、すぐに拾って無理やり口のなかにねじ込んだ。

ペットボトルを開け、水を流し込む。

少なかない水が、少女に溜まり、溢れだした水が、少女の頬を伝い地面に敷いた布を濡らす。

それを見て少年は。

頭を抱えて、壊れたように泣いた。



少年に財布をすられた男は、多いに焦っていた。何故ならそこには、お金以外にも大事なものがたくさん入っていたから。

「なんの騒ぎだ」

男たちに、眼鏡をかけた白髪の男が声をかける。

「ク、クロード様！ こ、こいつが財布をすられたんです！」

「財布を？」

「はい」

「大体いつ頃だ？」

「たぶんですけど、さっき人の密集する市場に行ったので、その時かと」

「盗んだやつに心当たりは？」

そのクロードの間に、男たちの脳裏に自分達が笑い者にしたガキを思い出したが、怪我也もあつたし、何よりクロードがそういう行った行為を嫌っていることを知っていた彼等は、首を振る。

「そうか……お前がとられたんだったな？」

「はい！」

「付いてこい。財布を取り返すぞ」

そこからクロードの行動は早かった。

クロードはほんの小さな痕跡すら見逃さず、男たちが何をしたのかを知り、誰にすられたのかを知り、どこでお金を騙しとられ、どこに向かったのかも聞きつけ、少年が家に帰りつく前に、その背中に追いついたのである。

そしてクロードと財布をすられた男は今、壊れたように泣く少年の声を、テントの目の前で聞いていた。

少年がテントに入ってから言動も全て見聞きしていたクロードは、般若の形相を浮かべ男を睨み付けてた。

「貴様、ビーハイブに所属しながら、こんな年端もいかぬ子供に暴力を振るい、笑いだしたのか」

「……………」

男は何も言わず、ただただ、目の前の少女の死体と、その側で頭を抱え壊れたように泣く少年の姿を青ざめた顔で眺めていた。

その顔はまるで、その光景を現実と受け止めたくないと言っているようで、自分達がこの少年に暴力を振るったという事実を、今すぐにでもなしにしたいと言っているような、そんな表情をしていた。

「……………しつかり見ている。そして、自分達がしたこと愚かさ、醜さを知れ」

それだけ言うと、クロードは少年にゆっくりと近づいた。

仕方がなしにクロードは少女の死体を運ぶよう、部下に命令する。

部下が少女に触れようとした瞬間、少年が突然飛び出し、男の手を払い、少女の体を抱き抱えると獣のようなうなり声をあげながら男を睨んだ。

男は、子供とは思えないその気迫に、後退すらしなかつたが、確かに怯んだ。

クロードはそんな少年の前に座り、しっかりと目を会わせる。

「その子は、君の妹か？」

うなり声が続く。

もう一度、聞く。

「その子は、君の妹か？」

反応なし。不意に少年の目が後ろの部下に向いてることに気づき、部下を下がらせる。

もう一度、聞く。

「その子は、君の妹か？」

ようやく、クロードの声が聞こえたようで、少年はうなり声を止め、クロードを睨み付ける。

「その子は、君の妹か？」

「……………違う」

しばしの沈黙。しかし、答えた。

「その子の、名前は？」

「……………エリー」

「そうか。いつから一緒にいた？」

「……………分からない。かなり前から」

「……………二人で生きてきたのか？」

「……………うん」

「親は？」

「……………エリーは捨てられて、俺は顔も知らない」

「……………そうか。君の名前は？」

「……………ない」

「……………ない？」

「……………ない。エリーには、ずっとお兄ちゃんって呼ばれてた」

「……………これからどうする？」

「……………なにもしない」

「……………何も？」

「……………このまま、死ぬまでここにいる」

そう言った少年の目は、まるで生気をなくした死体のようだった。

「……そうか。なら、私と来ないか？」

「……行かない」

「エリーの墓を建てよう」

ピクリと、少年が反応する。

「エリーの墓を建てよう。食べ物を受けよう。水をあげよう。お金をあげよう。力をあげよう。そして、家族をあげよう」

「………か、ぞく？」

「………ああ」

少年はしばらく考え、そして顔をあげた。

「エリーの墓を建てて下さい。でも食べ物も、水も、お金も、家族も要りません。その代わり、俺に、力を下さい」

少年にとって、力とはこの世の絶対的な正義であった。

せつかく稼いだお金も、年上のライバルに暴力で奪われる。町の大人たちには、良い様に殴られ、笑われる。裕福な子供たちからは石を投げられ、尿をかけられる。

この世は、力が全て。力の強いものが、正義。それを幼いながらに、少年は悟った。故に、少年が欲したのは力。それさえあれば、後は自然と手にはいる。

そんな少年の思考を、何となく感じとりながらも、クロードは何も言わずに、手を差し出した。

「私と来い。エリーの墓を建ててやる。力をつけてやる。そして、お前に名前をつけてやる」

少年は、力なく、しかししっかりと、その手をとった。

「おじさん。名前は？」

「おじさんではない。お兄さんだ」

「お兄さん、名前は？」

「私の名前は、クロードだ」

クロード。その名を小さく何度も呟く少年。

「……………クロード、クロード……………クロード……………クロード? ……く、ろー…………ド?」

次第に、口調が怪しくなっていく。

「どうしー」

次の瞬間、少年の脳はスプーンで脳みそをかき回されてるかのような激痛を感じ、耳を塞ぎたくなるような叫び声をあげて、そして意識を失った。

1話 目覚め、そしてー

目が覚めると、見知らぬ天井があった。

痛む頭でぼんやりとここがどこかを考える。

今俺は、とても暖かくてふわふわとしたものにくるまれていて、あのまま自分は死んでしまっていて、実はここが天国なのではないかと錯覚する。

途端、ここが天国なら、もしかしたら近くにエリーがいるかもしれないという考えに行き着き、跳ね起きた。

「エリーー！」

「きやああ！」

女の子の悲鳴が聞こえた。しかし、声は二つ。このどちらかがエリー？

バタバタバタと、駆けていく音が聞こえ、ドアを押し開ける音が聞こえる。

そちらに視線をやると、ちょうど部屋から出ていく長い金髪が流れていくのが見え、その後を一人の子供が追いかけていくのが見えた。

「お嬢ー！ お待ちくださいー！」

バタバタバタと、足音が遠のいていく。

俺はドアを呆然と眺めたあと、ゆっくりと部屋を見渡した。

白を基本とした、シンプルな部屋。しかし壁の出っ張っているところ――柱だろうか、そこには高そうなライトがあり、淡い優しい光をともしている。

カーテンから差し込む光は、高そうな絨毯をキラキラと照らし、迷い込んだ風は、これまた高そうなカーテンをヒラヒラと弄んでいる。窓から見える空は、きれいな青空だった。

エリーじゃなかった。ぼんやりと、そんなことを考えた。

黒色の長い髪。それがエリーだ。金髪で長髪出もなければ、黒く短い髪でもない。それに、声も違った。

エリーではなかったことに、失望と脱力感を強く感じ、視線を落とす。すると、視界の中に自分の骨と皮だけといっても過言ではない程の細い腕が映った。そして、肘裏から延びる、細い管も。

細い管を目で追うと、自分の寝ていた側に、何やら液体名入ったものがぶらぶらとおり、そこに管は繋がっていた。

(――点滴)

という言葉が頭に浮かんだが、点滴とは、何だろうか。どこかで聞いたことがあるような気がするが……分らない。

興味本意で、自分の腕に刺さっている管を抜いてみることにした。怖いので、ゆっくり、そつと抜く。

小さな、けれど鋭い痛みが走るが、抜ききった。

抜いた場所には、小さな血の泡ができていた。

その泡を、何となく眺めていると、ドアの開く音がした。

見てみると、そこには自分に手を差し伸べた男がいた。

「起きたか。気分はどうだ？」

「ー、ヒュー」

のどが痛い。声が出せず、空気の漏れる音がした。

「ほら、これを飲め」

差し出されたコップに、水がなみなみと満たされていて、俺はそれを受け取っては、慌

てて飲んだ。

「落ち着け、ゆっくり飲めばいい」

案の定、むせて少くない水を溢す。

再度渡された水を、今度はゆっくりと飲む。

のどが潤った。

「……あ、りがとう」

「ああ」

……………。

「わたしのこと、覚えているか」

男が聞いてきたので、頷く。

「そうか。私の名前は、分かるか？」

聞かれて、頭を振るおうとしてクロード。

その名前が、出てきた。

ズキ、と頭が痛む。

俺はとつさに、血の出ている左の手で、頭を押さえた。

「頭が痛いのか？」

「痛い。クロード、痛い」

「む、私の名前を覚えていたか、待ってる。痛み止を持ってきてやる」

そういうと、クロードは早足で部屋から出ていく。

俺はそれを目で追うことすらせず、必死に頭を押さえていた。

何故か、先程から全く知らない言葉が出てくる。漫画、アニメ、ニセコイ、クロード、

楽、千棘、鶯、小咲、るり、集、マリカ、ヤクザ、ギャング、警察、約束、結婚、大学、

車――死。

瞬間、弾けたように頭の中に記憶が流れ込んできた。それは、これまでの地獄のような辛い日々だけだけでなく、そのさらに前、まだ俺が別の人物であったときの、記憶。

転生。

その言葉が、頭に浮かんだ。



落ち着け、落ち着くんだ俺。

転生したなんて、そんな非現実的なことが起こるわけがない。

そう、頭では思いつつ……。

ーでは、今の俺の状態は、どう説明する？

俺の記憶は、前世で過ごしたある程度の記憶、そして、この世で生きた地獄のような飢え、痛みの記憶がある。前世の俺の名前や年齢は思い出せない。しかし、大学の帰道、夢く交通事故で死んだことは、朧気ながら覚えている。その記憶を夢だとは到底思えないし、思いたくない。

では、転生していないのだとしたら、今世の記憶は何だ？ 俺は今事故による植物状態になっていて、夢を見ています？ それは、絶対にあり得ない。あの飢餓と痛み、そしてエリーの死は、絶対に夢ではない。

ー転生、ということなのだろう。

それ以外に、考えられなかった。

ボタンと、ドアの閉じる音がして、思考の渦が霧散する。視線を向けると、そこには前世でも見たことがある顔があった。

「く、ろー……ド？」

眼鏡をかけた白髪の男。この人物を、俺は知っている。今世だけではなく、前世の記憶としても。

何故？ 答えは簡単。俺が前世で読んでいた、とある漫画の登場人物だからだ。

ニセコイ。

それがその漫画のタイトル。そこに、クロードという人物が出てくるのだ。眼鏡をかけた白髪の男が。

顔をまじまじと観察する。見れば見るほど、本人である。漫画のクロードよりかは幾分か若い。しかし、確実にクロードである。

……どうやら俺は、普通に転生しただけではなく、ニセコイという前世の漫画の世界

に転生してしまつたらしい。

なんてこつたい。

いや、正直に言うとは嬉しい。主人公の楽は正直あまり好きではないが、それでも俺の好きな漫画であることには代わりがなかったから。

ただ、1つ言いたい。

俺、最終巻だけ読んでないんだよー！

だから最後、どうなったのかすぐ気になる！ 結局楽はどっちを選んだんだー!?

俺が一人頭を抱え悶々としていると、クロードが慌てたように声をかけた。

「そ、そんなに頭が痛いのか!? 取り合えずこの薬を飲みなさいー!」

何やら盛大な勘違いをされたが、前世の記憶を思いだした反動か頭はまだ痛むので、ありがたく頂戴する。

「取り合えず、今日はこのまま寝なさい。まだ顔色も悪い。明日にでも、また話をしよう」

そう言つて、クロードは電気を消して部屋から出ていった。

静かになった部屋で、俺はこれからを考える。

まず、この世界がニセコイの世界だということは、ほぼ確定でいいと思う。多分だけど、さつきいた二人の女の子は、千棘と鶯だろう。

一瞬、俺が鵜になるのではないかと思っただが、流石にそれはなかった。だって俺、男だし。聖剣あるし。伝説の剣装備してるし。

じゃあ、俺は何者？ 原作に出てこないビーハイブのヒットマンのうちの一人……なのだろうか？

それとも、よくSSとかで見える……オリ主、という奴なのだろうか。

「ん………」

ん、分からん。なるようになるでしょう。

と、思考を放棄する。

原作に介入するようならオリ主。違うならただのヒットマン。それでいいではないか。

でも正直、漫画の続き、というか最終話がどうなったのか知りたいから、できるだけ原作に介入していけるように行動したい。

ではどうするか。取り合えず、ヒットマンになるのは確定。だって、この世は力が全てなんだから。当たり前だろう？

あと、俺には1つ、漫画を読んでいて気になっていたことがある。それは、鵜やポラが人を殺していたのかいないのか、ということだ。

彼女たちは原作後、恐らくヒットマンとは違う道に進むのではないかと思う。何故な

ら彼女たちは明らかに、表の人間になっていた。平和ボケとも言う。

これは俺のかつてな妄想だったのだが、鶯やポーラが人を殺したことがあると仮定する（絶対あると思うけど）。だとすると、やがて表舞台で生きていくことになるであろう彼女たちの、足かせになるのではないかと思うのだ。

——人殺しは、光ではなく闇の中で生きるべきだ。

みたいな。

そんな考えを、持たないだろうか。少なくとも、精神的な葛藤、苦痛を味あうことになるのではないだろうか。

もつといつてしまえば、原作中、学校生活で。

こんな平和な世界に、手が血で汚れきった自分はいるべきではない。……とか、思わないだろうか。

……………。

目標。彼女たちに人殺しをさせない。その役目は、全部俺が背負う。

それを、今世の俺の目標にしたいと思う。

原作に介入していくのか、しないのか。どうすれば介入できるのか分からない。だから、取り合えずこの目標だけは、達成しよう。

そう固く誓って、俺はゆっくりと目を閉じた。



「お前の名前は、弥柳優（みやなぎゆう）だ」

次の日の朝、クロードが部屋に入ってくるなり、そう言った。

「……はい？」

こんな反応をした俺は、何も悪くない。

というか、今世でのこれまでの暮らしを夢で見て、精神が大分まいっているその状況下で突然話しかけられたら、内容問わず誰でも俺のような反応をするだろう。

ってちよつと待て。今名前って……。

「だから、貴様の名前だ。弥柳優。それがお前だ」

「……な、まえ？ ……おれ、の？」

名前。名前。俺の、名前。

みやなぎ、ゆう。

「お前は見たところ、日本人のようだからな。日本人の名前にすることにした」

俺の、名前――。

スー……と、頬を何かが伝う。

「優^レにしたのは、お前に優しい人間になってほしいからだ。力を求めるなら、優しさを知らなければ、本当の力意味での力なぞ分からんからな。弥柳は、私がテキトーに決めた。悪く思うな」

そう言つて、フフンと笑うクロード。

「お前には、これから我々の組織ビーハイブのヒットマンになつてもらふ。力をつけるには最適だと思ふぞ？」

ああ、涙が、止まらない。

俺に、名前が付いたー。

夢で荒んだ心が、ぼかぼかと暖まってく。

冷たい雨が止み、お日様が顔を出したように。

エリーが初めて、俺に笑顔を見せてくれたあの日のように。

俺の冷えきつて、荒んで、壊れている心に。

確かな温もりを感じて、俺は静かに泣いた。

オリ主設定

弥柳優（みやなぎゆう）。

転生者。

人種、年齢ともに不詳。

弥柳という名字から分かる通り、ヒロインは小野寺小咲。

鶯と同じでクロードに拾われた孤児。日本人であろう容姿はしているが、詳細は不明。その容姿から、鶯同様クロードがテキトーに名付けた。

いわずもがな、イケメンである。

容姿の具体的なイメージは特にしてないので、各自妄想で補ってください。

目付きは鋭く、あまり感情が表に出てこないため、怖がられることが多い。↓というか、無表情。

ヒットマンの腕は……まあブラックタイガーより上とだけいっておこう。

鶯やポーラの”殺し”の仕事を全部一人でこなしていた。そのため、鶯やポーラはヒットマンではあるが、人を殺したことはない……という設定。（↑無茶かなあ……

逆に、人を殺し続けてきた自分は、あまりみんなと関わるべきでないと考えており、ど

こか一步引いた位置にいろことが多い。

クロードに拾われるまでの生活、エリーの死により、弥柳優の心は一度壊れた。しかし、前世の記憶を思いだしたことにより、壊れているが、壊れていない……という、何ともよく分からない状態にある。

いや、まあ普通に壊れているんだけどもね？ 前世の記憶のおかげで、深刻だけど、深

刻じゃないみたいなの……。言いたいこと、分かるでしょう？ ……え？ 分からない？

作者もわかんない（泣き

クロードに拾われてからは、兎に角健康な体作りから始まった。体内に寄生虫がたくさんいて、かなり苦労した。千棘とはその間だけ話をしたりしていたが、それ以降は全く会っていない。

幼少の頃の食生活のせいかな、舌がおかしい。千棘や小咲のヤバイ料理を普通に食べる。

主人公曰く、「カビ生えて泥がついてて汚水やら犬やらの尿が染み込んだパンよりまし」とのこと。↓後に本文でこの台詞まんま使うかも。

別に食べられない食材は使われていないのでへーきへーき。死にはせん。

心を開いた人と、そうでない人とでの接し方の差がありすぎて、調子にのつてるやら、避けられているといった印象を与えてしまう。

自分の中でしつかりとした考えをもっており、それにともなつた行動をするため、楽と価値観の違いで意見の対立になることがたまにある。

正直、ちゃんとキャラが定まってないところがあるが、その方が人間っぽいよね！と開き直すことにした。

装備

リボルバー（装填数6発のスタンダードなもの。銃名？ 知らぬ）

投擲用ナイフ数本（近接戦もできる丈夫なやつ）
以上。オリ主のふわつとした設定でした。

第2話 原作開始

俺がクロードに拾われてから9年6ヶ月が経った。

いきなり時間が経ちすぎだと思われるかもしれないが、察しろ。とても紹介できるような内容ではなかったのだ。

特に訓練。何あれ地獄。一体何回走馬灯を見たことか。

そうそう、俺が目を覚ましたとき部屋にいた女の子二人、あれはやっぱり千棘と鵜だった。二人とも可愛かった。クロードは何をどう見て、鵜を男だと判断したのだろう。不思議だ。

千棘とは、訓練が始まってからは一度も会っていない。訓練が大変だったし、訓練が終わってからは”殺し”の仕事に鵜とポーラの分も含めてしていたため、そもそも屋敷に帰っていない。仕事も、基本的にはクロードからメールで指示が来るので、すぐ次の任務に向かっていた。

鵜は今でもヒットマンとして一緒に任務をこなすことがある。ポーラとも出会った。逆に、当たり前だが他の原作キャラとは会っていない。千棘の父でビーハイブのボスであるアーデルトとは出会ったが、母親とは会っていない。

まあそんな感じで、基本俺は世界中を飛び回り、仕事をしていた。お陰でいろんな国の言葉を話せるし、色んな技を身に付けた。色んな屑を見てきたし、似たような境遇の子供たちも見た。

ザリツ、と足音をたて、俺は久しぶりに帰ってきた場所で立ち止まる。偶々任務で近くを通ったから、ついでに花をと考えたのだ。

彼女の墓は、クロードの計らいにより小さな丘の、しかし景色のきれいな自然の豊かな場所にたててある。

目の前には、崩れたテントの残骸があった。俺とエリーが生きてきた場所だ。かつての俺達の家。俺が建てた家。そして、エリーが死んだ場所。

俺はポケットから一輪の赤い花を取り出す。エリーが好きだった花だ。それをそつと置く。

最近は何で忙しくて墓参りに行けていない。今度暇をもらっていくとしよう。

そう考えながら手を合わせていると、無機質な電子音がこだました。

「はい」

「優か、私だ」

「クロード様。新しい任務で？」

「ああ、だが、今回はいつもと違う内容だ。一週間後、日本にあるとある廃工場に來い。

そこで詳しく話す。場所の詳細は、またメールで送る」

「了解しました」

それだけ言うと、通話を切る。

直後、メールが届いた。

そのメールを確認したあと、もう一度だけ手を合わせては、次の瞬間には、成長した少年の姿は、どこにもなかった。



深夜2時頃。

日本にあるとある廃工場の前に、俺はいた。今夜は風が強く、「オオオオオ」という音が、何処からともなく聞こえてくる。

……これ、本当に風か？

何て思っているか、ふと後方に気配を感じた。ふむ、上手く気配を隠しているが、まだ甘い。

俺はその知っている気配に声をかけた。

「久しぶりだな。 鵜」

「む、気づかれたか。流石だな、優。久しぶりだ」

「ここにお前がいるということは、今回はお前と一緒に任務か」

「だろうな。クロード様は中か？」

「恐らく。……そろそろ時間だ、行くぞ」

二人で閉じている門を軽く飛び越え、工場内に侵入する。少し歩き、角を曲がると、そこには白いスーツを見事に着こなした、眼鏡をかけた白髪の男がいた。

「いわずもがな、クロードである。」

「……お呼びですか、クロード様……」

「……来たか。待ちわびたぞ、お前達」

そういうながら近寄ってきたクロードは、懐から二枚の写真を取り出すと、鶴と俺にそれぞれ手渡した。

その写真を見て、俺は思わず吹き出しそうになるのを、何とか堪える。

「何故ならその写真に映ったいる人物は……」

「こいつがお前達の次の任務の標的。名は、一条楽」

「……一条楽。そう、ニセコイの主人公だった。」

「原作介入来た……!!!」

と、俺が内心で喜んでいるなかで、会話は続く。

「既に聞き及んでいると思うが、お嬢は今この男と交際関係にある。しかし私はお嬢はこの男に騙され利用されているとにらんでいる。狡猾な男だ……」

そんなわけあるかい。

何でこの人優秀なのに時々ポンコツになるのだろうか。過保護にも程があるし、原作の千棘を見る限り、騙されるような女じゃないし、騙されたところで力で何とかしそう。

グシャ。

……グシャ？

音の発生源である隣を見ると、鶴が般若の形相を浮かべ、写真を握りしめていた。

「お嬢を……許せませんねその男……」

ふむ。原作通りの反応ですな。

「……おまけにチビで下品で雑魚で小物で貧弱で（以下略）……こんな男をお嬢が選ぶはずがない！ お嬢にベタバタしやがって。思い出すだけで腹立たしい！」

嫌いすぎだろう……。あと本音。もうちよつと隠そうぜ。

「そ……そんなにですか、許せませんねその男……」

「私ではお嬢を直接お守りすることができない。だが私が育てた優秀な部下であるお前達ならば、あんのクソガキ（以下略）……の魔の手からお嬢を救い出すことができるだろう」

クロードの言葉を聞いて、鵜の目にはつきりとした決意が現れる。

「了解しました。お嬢は私が必ず救います……!!」

そういうやいなや、鵜は背を向け歩いていった。

「優、お前はどうか？」

「……お任せを、クロード様」

（ええ、お任せください。きつちり原作の最終話、この目で拝んできますから！）

目的は違うのだが、優にも確かな決意の色が伺えた。

それを見てクロードはそつと息を吐くと「頼んだぞ」とだけ言い残してその場をあとにした。

俺はそれを見送ると、スキップしたくなるのを必死でこらえつつ、鵜に追い付く。

「何だ？ やけに嬉しそうだな……」

気づかれた。

「ああ。……久しぶりにお嬢に会えるとなると、な」

適当に誤魔化す。

「ああ、そうか。優は7年ぶりになるのか……。そうだな。私もお嬢に会えるのが楽しみだ。きつと、また一段とお綺麗になられてるのだろうなあ」

そうトリップする鵜を横見に苦笑する。

俺は久しぶりの高校生活、また原作への期待と、俺が介入することによる原作の改変が起こる可能性に不安を抱きながら、夜空を見上げた。



カツカツと、鵜と同じ他校の制服に身を包み、凡やり高校の廊下を鵜と並んで歩いている……のだが。さつきから、むっちや見られてる。そしてむっちやヒソヒソされる。

今まで気づかなかったが、あれだ。俺、目立つの嫌いだわ。

ほら、今までずっと暗殺とかしてたから、人の視線が俺に集まるようなことって、ぶっちゃけあんまりなかった。町中でも基本的に気配殺して、人の意識の隙間を縫うように移動していたから、視界に映っても、記憶には残らない、そんな動きをしていたからこんなな目立つことがなかった。

視線が痛い。敵意やら殺意やら、そう言った視線ならそれこそ腐るほど浴びてきたが、好意的な視線は、はじめてだ。

「落ち着かないな……」

「そうか？ 私は何も気にはならんが……」

「いや、お前はそうかももしれないけど、俺はこんな好意的な視線、はじめて向けられたか
らさ。何というか、背中がムズ痒い」

優の何気ない一言に、しかし鶯はその整った顔に影を落とすし、どこか申し訳なさそう
な、そんな表情をした。

「……どうした？ 体調でも悪いのか？」

「いや、何でも無い。それより早く職員室へ向かうぞ」

鶯のそんな様子に、優は首をかしげながらも鶯のあとについていった。

今世では学校をはじめてだ。視線で落ち着かないが、それでも久しぶりの校舎とい
ものに、懐かしさを感じる。前世の校舎はここほど綺麗ではなかったが、それでもど
か似たような構造に、胸が熱くなるのを感じた。

職員室を出て、これから教室に向かう。担任の先生である眼鏡をかけた女教師のあと
に続く。誰であろう、キョーコ先生である。

結婚して辞めていくのを知っているの、今から何というか、祝福したい気持ちに
なつた。

「二人とも、準備はいい？」

「はい」

「それじゃ、私が呼んだら教室に入ってきてね」

ガラッ。

「よしお前ら、突然だが今日は転校生を紹介するぞー。入って鶴さん、弥柳君」
教室に入る。視線が突き刺さる。

自己紹介は鶴から。俺は今のうちに、クラスメンバーを見る。千棘、楽、集にりり、そして小咲を見つけた。うん、可愛い！

あ、あれはゴリ沢！ マジでゴリラがいる。リアルで見るとますますゴリラだ。

「初めまして、鶴誠士郎と申します。どうぞよろしく」

「初めまして、弥柳優です。よろしく」

二人が自己紹介をした、次の瞬間ー

「「「キヤーーーーーー!!!」」」

と、女性から黄色い声があがった。

第3話 決闘

「「「「キヤーーーーーー!!!」」」」

……うるさい。

なぜ自己紹介しただけでここまで盛り上がれるのか。

「どうしよう! 二人ともすっごいイケメン〜!!」

「モデルさん!?!」

「顔ちっちゃ〜い」

「爽やか系イケメンとクール系イケメンだわ!」

爽やか系イケメンは鶯で、クール系イケメンは俺か?

というか、鶯がイケメンって……こいつ女。

「二人とも、空いてるところに」

「はい」

空いてるところにつて、後ろの2席ですれ分かります。鶯よ、俺は窓際の席で構わんよな?

鶯にアイコンタクトで会話をすると、鶯もアイコンタクトで返事してきた。

よっしゃ！ 一番後ろの窓際席ゲットだぜ！

二人で席に向かう途中、楽と目が合う。

「……………フツ」

あ、こいつ楽を笑いやがった。

軽く鵜の頭を軽くはたく。

鵜は俺にはたかれた後頭部を軽くさわりつつ、抗議の目を向ける。

「……………何をする」

「よくも知りもしない人をいきなり笑うな」

「……………フン」

……………分かっていたことだけど、鵜の楽へのはじめの評価はかなり辛辣なものがあるな。

やれやれ、と俺が思っていると、ガタツと誰かが立ち上がる音がある。

「……………!! ………………つぐみ!!」

……………あれ？ 俺は？

「お嬢……………お久し振りですお嬢————!!」

久しぶりに出会えた千棘に感極まったのか、鵜が千棘に抱きついた。

そして次の瞬間、教室は最高の盛り上がりを見せる。

「「「キャー……!!」」」

「「「おおお!!」」」

「転校生が桐崎さんに抱きついた〜!!」

「バ、バカ! 何やってるのよみんなの前で…!」

「ああお嬢…! お会いしようございました!!」

「まさかのライブ登場!」

「修羅場?! 修羅場なの?!」

えーと、何コレ。いや、原作知ってるからこうなるって知ってたのだけれど、実際にその場にいるとどうしたらいいのか分からんな。何? 俺も抱きつければいいの? というか、お嬢俺のこと忘れてない? さつき名前呼ばれなかったし。何コレ完全に蚊帳の外にいるんですけど……。

いや逆に考えるんだ俺。今みんなの視線はお嬢と鵜の百合現場に集中している。なら今のうちに気配を消して一気に自分の席に向かおうではないか。

スツと身を引き、フツと気配を消す。僅かに向けられていた視線も、俺から外れる。向こうからしてみれば、俺がいきなり消えたみたいに見えるだろう。

俺はそのまま人の間を縫うように移動し、自分の席にたどり着いさくと、腰を下ろす。ただ腰を下ろしたただけなのに、この懐かしさ。ヤバい。何か感動してきた。してき

たーののだが。

「……でもこれって一条に勝ち目ないんじゃないかね？」

「うん。完全に顔で負けてるし」

「ああ、勝負にならない」

「……うん。この教室面白すぎか。確かに、鵜が男なら勝負になってなかったと思う。男なら。」

鵜と千棘に視線を向けると、俺達がここに来たのはクロードの「お嬢の側について聞かぬよ」という名を受けたということ話を話す鵜の姿があった。

なるほど、上手い言い訳だ。確かに俺達はあまり表の世界の見聞は広くない。

「……とここでお嬢には、最近とても素敵な恋人ができたとか」

「ええ!？」

「よろしければ、私にも紹介して頂けませんか？」

お嬢、明らかに動揺してる。

「ちよつと楽、こつち来て!」

「あ?」

「彼! この人が私の恋人よ……!」

「あ、ども……」

二人とも、笑顔がひきつってますよ。ほら、もつと自然に！

「おお…… お噂はかねがね聞いておりましたがこうして直にお会いすると何とも頼りがいのある方ではありませんか…… 素晴らしい!! これでビーハイブも安泰ですね!!」

わ、わざとらしい！ 鵜ももつと自然に！ お噂（クロードによる罵倒大会）しか聞いてないから無理ないかもだけど！

そのあと、楽がうっかり千棘のことをゴリラ呼ばわりしたり、千棘と鵜がイチャラブしたりして、教室が多いに盛り上がった。その間の女子の反応、面白すぎ。

「あの二人ってそういう関係だったんだ!!」

「でもぶっちゃけそっちの方が似合ってない？」

「バカ……聞こえるよ」

聞こえてますよお嬢さんがた。

と、クラスメイトの反応を楽しんでいると、鵜と楽が教室を出ていった。恐らく屋上に行くんだらう。俺もいくか。

心配を消して、女子の隣を通る。

「ねえねえ、弥柳君に話しかけようよ！」

「いいけど私ちよつと弥柳君怖いかな。格好いいけど、表情が全然変わってないから

……」

「えー？ それがいいんじやんクールじゃん！ それに話してみたら以外と面白いかもよっ。」

「……それもそつか、じゃあいこう！」

もしもし、ボク弥柳君。今君達の隣にいるの。

なんてバカなことせず、さつさと教室を出る。

「……あれ？ 弥柳君は？」

「いない……。さつきまでそこにいたよね？」

「……どこにいったんだろう？」



「お嬢の事を、本気で愛していらつしやいますか？」

「ブツ!! バツ……。……つたりめえよ」

ところ変わって屋上。……楽お前今否定しかけたろ。

「……そうですか。どのくらい愛してるんですか？」

「そりやもうとんでもなく愛してるよ……。!!」

「本当に?」

「本当に」

「本当の本当の本当に?」

「本当の本当の本当に!」

「お嬢のためなら死んでもいい?」

「おう! 当然その覚悟だ……!!」

「……では、死んでください」

うわーお。流れるように死んでっていったぞあいつ。

しかも実銃を袖から取り出して楽押さえつけやがった。

「……フン、ガツカリだな……。お嬢が惚れ込んだ男だと聞いて来て見れば、注意力は散漫、反応も鈍い、おまけに無防備。これでどうやってお嬢を守れるというのか……。ハッキリしたよ。やはりお嬢は貴様に騙され、偽りの愛に縛られているのだと……。!!」

楽、お前「えええ!」みたいな反応してるけど、ある意味鶯のいつてることあつてるからな?

偽者の恋人に縛られてるんだし……。「今は」っていう言葉がつくけど。

「吐け。目的は何だ。我々の縄張りか? それとも組織の乗っ取りか?」

いや、それはない。楽にそんな度胸はない。

「……分からん。お嬢はなぜこんな男を……。例え騙されているにしても、こいつに欠片ほども魅力があるとは思えない！ 軟弱で……軽薄で……!!」

確かに、軽薄なところはある。原作でもそれでイライラさせられたこと、結構あるし。

「……ていうか！ ぶつちやけ絶対私の方がお嬢を愛してるのに……!!」

ブフツ……。失礼。思わず吹き出してしまった。だってあの鶯が地団駄踏んでるんだぜ？

正直この場所にきたのは、その姿を見たかったからなのさ！

「……フツ、まあいい。貴様のような小虫にあれこれ策を弄する必要もないだろう。正々堂々と、貴様からお嬢を奪って見せる！ すぐに証明してやろう。お嬢の隣にふさわしいのはどちらなのかを……!!」

あらやだイケメン！

もう鶯男でいいんじゃない？

「……おい、待てよ。好き勝手言ってくれやがって。……誰があいつの隣にふさわしいかだって？ あいつは俺の恋人だ!! 誰にもあいつは渡さねえ!!」

おおく！ 楽もイケメンだ。よし、なら今の台詞小野寺の前で言ってもらおうか。

「おおおおお!!」

「あ、お嬢」

「うっひゃあああ!! あ、あんたいつからそこにいたのよ!? ていうか、あんた誰よ!」
「あ、やっぱり俺のこと忘れちゃってます? まあいいですけど。あと、いつからいたのかっていうと、最初からです」

「全然気づかなかったわよ。……ていうか、あんた私のこと知ってるの?」

「そりゃあ、俺もビーハイブのヒットマンですし」

「へ〜……。あんたうちのヒットマ……ええ!?!」

「ほら、そんなことよりいいかなくていいんですか? 何やらよろしくない雰囲気ですけど」

「ああ!?!」

見ると、鵜が切れかかっており、何やらどす黒いものが……!!

千棘はすぐさまドアを開け放ち、屋上にでる。

俺もそのあとに続く。

「ちよ、二人ともストップストップ!! ほらほら何やってるのよ鵜もダーリンも。ちゃんと仲良くしなきゃダメでしょ?」

「お嬢、優も……」

「よっ」

「あれ? お前は……」

「どうも一条楽。鶴と一緒に転校してきた弥柳優だ。よろしく」

「あ、ああ……よろしく」

「お嬢、優……止めないでください」

「え……」

「俺は止める気なんてないよ。寧ろもつとやれ!」

「おい!」

「そ、そうか……。お嬢には申し訳ないのですが、私はやはりこの男をお嬢のパートナーとして認められない! 私は10年前、お嬢と約束したあの日、お嬢をこので守れるように強くなろうと決め、あらゆる訓練試験に耐え! 日々精進し! それこそ血の滲むような努力をして強くなったんです!! それなのに何故、お嬢を守るべきはずの男が、こんな脆弱で貧弱でもやし男なのですか!! 納得いきません!」

ブフツ。もやし男!

「お嬢は大ギャングビーハイブのご令嬢。お嬢の恋人というならば、守れるくらいの相應の力を見せてもらわねばみとめるわけにはいかない!! 一条楽! 貴様にお嬢をかけて決闘を申し込む!!」

「…はあ?」

「私に勝てる実力があるのなら、成る程。貴様のことは認めよう。しかし私に勝てない

のなら、貴様は地獄以上の苦しみを与えた上で殺す!! 時間は今日の放課後。逃げれば殺す」

うん。まあ正直にいうと、鵜のいつてることつて的を射てるんだよな。

鵜が屋上を出ていったあと、暫しの沈黙がおける。

「ど、どうしよう……」

「あくもう! やつぱりこうなったか!!」

「…お前、あいつがあーゆう奴だつて事……」

「知ってたわよ! 当然でしょ? あの子はね、多分クロードの差し金よ」

「その通りです」

「うわあ!」

え、何で驚いてんの?

「お、お前まだいたのか!」

「び、ビツクリしたあ……」

「え、ちよつと酷くない? 俺ずつとここにいたよ?」

「あ! そうよあんた! あんた何者なのよ! あなた家でも見たことないわよ!」

「いや、ありますよ? ほら、9年前にクロード様に拾われた孤児ですよ。ほら、ベッドの上でずつと機械に繋がれてた男の子です。覚えてませんか?」

ポクポクポクチーン。

そんな音が聞こえた。

「あああ、あんた、あのときの子!? え、嘘でしょ!!? こんなところにいて平気なの? あんたすつごい体弱かつたじゃない!」

「思いつきでいい体弱かっただけじゃないか。ええ、もう大丈夫ですよ。実に健康体です」

「あゝ……えつと?」

「ああ、楽。この子も昔クロードが拾ってきた孤児だね。もう体がガリガリに痩せて、体重は軽くて、しよっちゅう熱を出しては体のあちこちが痛いって言う子だったのよ」

「まああの時は寄生虫とかが体内に大量にいたりしましたからね」

「き、寄生虫……」

「ええまあ、汚水とか普通に飲んでましたし」

「そ、そうか……。えつと、「も」ってことは、鵜も?」

「ええ。鵜もクロードが拾ってきた孤児だね。特殊訓練と英才教育を受けて育てられた優秀なヒットマンなの」

「ヒツ……ヒットマン!!?」

「あ、ついでに俺もヒットマンです」

「お前も!」

「因みに鶴は昔、私にちよつかいだしてきたゴロツキを組織後と壊滅させた超凄腕」
「そ、組織ごとつすか!？」

「きつ…聞いてねーぞそんなの!! 俺そんなのと決闘すんの!? つーかあいつはお前の味方なんだろう!？」 何とか事情話して説得する事とか出来ねーのか…!？」

「事情……?？」

「あつ……」

「一条楽」

「はいっ!」

何コレ楽しい。

「お嬢と付き合っているのには、何かの事情がある?？」

「あつ……いや、コレは……」

千棘と楽が視線で会話してる。

おおかた、「し、しまったろ!!」「な、何やってるのよこのバカ!」「わく! 悪かつ

たつて! ていうか、この状況どうすんだ!」「知らないわよこのバカ」……みたいな会話をしてるんだろうな。

「ブフツ」

「!!?」

突然俺が笑ったのに驚いたのか、二人ともビクツて反応をする。

「も、申し訳ありませんお嬢。あまりにも面白かったもので……!」

ポカーンとして二人。

「はあく面白かった。大丈夫ですよお嬢。俺は二人が偽者の恋人だつてこと、知つてますから」

「はああ!」

「え、嘘でしょ!? いつから!?」

「いつからつて、最初からですよ。見ただけで分かりますよ。あんな見え見えの演技じゃ」

「え、嘘……。そんなに分かりやすいの?」

「あくでも大丈夫ですよ? 鶴もクロード様も気づいてませんし、俺も言うつもりはありませんから」

「そ、そうなの……。良かった」

「いや、よくねえよ!?! 今のままじゃそのうちバレるかも知れないだろ!?!」

「あ、それはあるかもだな。もう少しお互い演技上手くなつてください。まあ見てる分には面白いので、俺はこのままでもいいと思えますけど」

「よくない!」

「まあまあ、それは取り合えず置いておくとして、どうするんです？ 決闘」

決闘という一言に、今まで忘れていたのかハツとする二人。

「お前、どうにかできないか？」

「それは無理。お嬢は知ってるかもしれませんが、あーなったら鵜は手がつけれん」

「そ、そんな……」

「……負けんじやないわよ」

ボソツと、お嬢がそんなことをいった。

「……え？」

「べっ……別にあんたの事心配してるんじゃないけど……!! あんたが負けると色々大変になるでしょ!! 責任重大なんだからハマしたら許さないんだから!!」

何このツンデレ。可愛い。

俺がニヤニヤしていると、千棘から「そこ！ ニヤニヤしない！」と怒られた。

「しかしお嬢。一条が勝つなんて絶対無理ですよ？」

まあ、勝っちゃうんだけど。

「え？」

「いや、普通に考えて無理でしょ。一般人とヒットマン。勝負にすらならない」

「なっ！ ……そんなの、やってみないと分からないだろ！」

「いや分かるだろ……」

「ちよつとぐらい可能性が……!!」

「……無いつて、言ってるだろ」

次の瞬間、俺は楽の喉元にナイフを突きつけた。



楽 side

弥柳に一時期千棘との話を聞かれてヤバいと思ったが、こいつ、以外といいやつだった。

表情は笑うとき以外全然変わらないが、それでも鶴よりは話しやすいし、取っつきやすいように感じる。

………が。

「しかしお嬢。一条が勝つなんて絶対無理ですよ?」

「え?」

「いや、普通に考えて無理でしょ。一般人とヒットマン。勝負にすらならない」

さすがに、カッチーンときた。

「なっ！ そんなの、やってみないと分からないだろ！」

「いや、分かるだろ……」

……こいつ！

「ちよつとぐらい可能性が……!!」

「……無いって、言ってるだろ」

そう、ゾツとするような冷たい声が聞こえたと思った瞬間。目の前から弥柳が消えたと思つたら、いつのまにか喉元にナイフを突きつけられていた。

あまりの事に、息を飲む。

鶯なんて物じゃなかった。

鶯は確かにずば抜けた身体能力を持っていて、それこそ一瞬で距離を詰められて銃を突きつけられたけど、それでも飽くまで目に見える範囲だった。

だけど、目の前の男はどうだ？ 目で追うことすらできなかった。一瞬で姿が消えたと思つたら。いつのまにか目の前にいて、喉元にナイフを突きつけられていた。

ヤバい。

本気でそう思った。

合わされた弥柳の目は、何の感情も映さず、静かで鋭い殺気を確かに纏っていた。

蛇に睨まれたカエルとは、この子とを言うんだらうなと思った。冷や汗が止まらな

い。

「楽！」

千棘の音が、やけに遠くに感じた。



「楽！」

千棘が驚きの声をあげる。潮時か。

俺はフツと小さく笑うと「冗談だ」と言つて楽を解放した。

楽は腰が抜けたのか、その場に尻餅をつく。

千棘が慌てて駆け寄ると、俺をキツく睨み付けた。

「すいませんお嬢。やりすぎました」

俺の物言いに、千棘は何かを言おうとして：しかし、キツく食い縛る。

「本当よ！ やり過ぎよ！」

「すいません……」

「私じゃなくて、楽に謝りなさい」

「一条楽。すまなかつた」

ペコリと、頭を下げる。

「あ、ああ」

樂の顔はまだ青い。

……しまったな。ちよつとだけびびらせるつもりが、思つたよりもキツかつたらしい。ヤクザの息子なんだから、多少は大丈夫だと思つてただけけど……。鶉にも実銃突きつけられてたし……。

「すまなかつた一条樂。でもな、お嬢の恋人というならば、こんなことはいつか来ると思つていてほしい。ビーハイブに恨みをもつやからは、それこそ星の数ほどいる。そんな組織の令嬢を、やつらがターゲットにしないわけがない。別にすぐに同行しろと言うつもりはないが、いずれ力をつけてもらわないといけなくなる。それが、例え偽者の恋人でもな」

「……………」

反応なし。

「まあ何だ……。お詫びとして俺から少し鶉と話してみるよ。けど、あまり期待しないでくれ。それじゃ、すまなかつたな」

それだけ言うと、俺は屋上から出ていく。

しまったな。こんなつもりじゃなかつたんだが……。何か後味の悪い結果になつて

しまつた。

第4話 決闘2

屋上を出てから早歩きで教室に向かっていると、鶯の背中が見えた。

「鶯」

「優か。どうした？」

「一条楽との決闘だが……」

「それがどうした？ 手加減でもしろと？」

「いや、そこまでは言わないけど、実銃は使うなよ？」

「……」

「おい、黙るなよ」

「……」

「……」

「……殺しはしない」

「そりゃそうだろ」

また沈黙。

「何か……考えがあるのか？」

「ああ」

「そっか。なら好きになるといい。だけど、流石にやばそうだと俺が判断したら、あの時みたいに無理矢理でも止めるからな？」

「分かった」

それだけ言うと、鶯はもう用はないとでも言うようにきびすを返して教室へ向かった。

その背中を見て、俺はひとつ思い出したことを口にする。

「あーそうだ鶯。お前、クロード様みたいな考えを持っているのなら……負けるかも知れんぞ？」

確実に、俺の声は聞こえただろう。鶯は一瞬立ち止まるも、すぐに歩き出した。

俺は小さくため息を吐く。

あの時の話をする、鶯は何だか不機嫌……ではないけど、嫌な顔をする。それがどういいう感情から来るものなのかは、俺にはよくわからない。しかしそうだな、あえて上げるとすれば……後悔と怒り。そんな気がする。

「……フツ。逃げずに来たことは誉めてやる」

「いやー、ハニーにいいところ見せなきゃならないんで」

時は過ぎ、放課後。

楽と鶴は現在向かい合っているが……楽の顔色が優れない。明らかに俺のせいですね、分かります。逆に鶴は、自分が負けるはずがないとでも思っているのか若干顎が上がつており、確実に楽を見下しているのが伺えた。

まあそんな楽も千棘に何か言われたのか、千棘の顔を見ると気を引き締めた。漫画の時の楽は、嫌々……出はないかも知れないけど、覚悟はなく、少しのやる気だけがあるような表情をしていた。

……まあ、その表情は周りのギャラリーのせいだったとは思うのだけれど。

でもそれでも、ギャラリーたちを見て苦笑いはしたが、すぐに顔を引き締めた。

因みに、集は原作通り賭けを行っている。因みに楽に賭ける奴は原作通りゼロだった。

……仕方ない。楽の背を押してやるか。

「一条楽に食券20口」

その声は決して大きくはなかった。しかし、やけにみんなの耳に届いた。もちろん楽と鶴にも。

楽が驚いた表情で俺を見る。

「何だ一条楽？　ほんの少しでも勝てる可能性があるかもしれないんだろ？　なら、やってみろよ。それで、俺の言ったことを、否定して見ろ」

言いながら、キヤラじゃないな、と内心苦笑する。いや、実際にしていたかも知れない。

楽は驚きながらも、しかし次第にその表情に笑みを浮かべ、こう言った。

「おう！　ハニーと一緒に俺の良いところ見とけ！」

ふむ。まだ少し顔は固いが、良い顔になった。以外と言ってみるものだな。

ただ鶴。あまり俺を睨まないでくれるか。いいじゃないか、お前クラスメイトにむつちや応援されてんだし…。

あまりにも鶴が俺を見てくるので、仕方がなしに口パクで頑張れよと言うと、ふんつとそっぽを向いた。しかしその顔は少し赤らんでいるように見える。

何それ可愛い。

いよいよ決闘が始まるようで、鶴がポケットからコインを取り出す。

「……このコインが地面にいたら決闘開始だ。覚悟は良いな」

「……おうよ」

ピンツ、とコインが弾かれた。

そして――

バシヤシヤン!!

コインが地面につくと同時に、鵜が大量の銃を取り出した。

ダツシユで逃げる一条。それを銃を乱射しながら追いかける鵜。

「あれ本物？」

「まさか〜」

本物です。音と硝煙の香りで分からないかな？

しかし確かに鵜は当てるつもりはないらしい。全弾地面などに当たってる。

……何か原作通りにいきそうだな。確か…プールに飛び込むんだっけ？ ……先回

りしとくか。

俺は気配を消し、プールに向かって誰にも気づかれずに歩いた。

「ちよつと優、何でダーリンに……あれ？ 優、どこいったの？」



楽side

「…楽、大丈夫？」

千棘が心配そうに聞いてくる。けど、正直構ってられない。心臓の音が耳元で聞こえる。

「……………く、ねえ、楽ってば」

「うおおー！」

肩を思いつきり叩かれ、ハツとする。

「ねえ、本当に大丈夫？ 決闘やめた方がいいんじゃない？」

「……………いや、決闘はやるよ」

「え？ 何で？」

俺の言葉が以外だったのか、千棘は呆けた顔を向ける。

「いや、男が一度受けた決闘を投げ出すのはダメだろ。カッコ悪い。それに、決闘に勝てば、あいつにも一泡ふかせられるじゃねえか」

正直、あの時の弥柳は怖かった。本当に殺されるんじゃないかと思った。だけど、よく考えてみたら、俺はそんな世界にいた筈なんだ。

千棘と偽の恋人をすることになった日も、クロードの撃った弾がすぐ横を通ったし、それ以前にも、家のやつが耳を飛ばされてたりしてたんだ。

今までは、本当の殺気っていうものを向けられなかっただけなんだと思う。さつきも鶴に銃を突きつけられたけど、それでも撃つまではしないって、何となく分かったから。

だから、今こんなにも恐怖を感じてる。

思い出せ。俺はコレまでも、こんな血生臭いところにいたじゃないか。

そう思うことで、無理やり心を落ち着かせていく。

「……本当に、大丈夫なのね？」

「ああ」

「……っそ、ならいいわ。……それにしても何なのあいつ！　いくらなんでもやり過ぎよー」

何か、コイツが怒ってるのを見るところをみると安心するな。

「ああ、いいよ別に。謝ってくれたし」

「……でもー」

「それにほら、あいつ本当に申し訳なさそうだっただろ？　もしかしたら、ちよつとから

かうつもりだったのかもしれないぜ？」

「……そうは思えなかったけど」

俺もそう思う。でも、今思い返してみると、あいつ本当に申し訳なさそうにしてたから、たぶん、大丈夫。

「取り合えず、教室行こうぜ。授業に遅れる」

「……分かったわよ。でもあんた、決闘するからには絶対に勝ちなさいよね！　それで

鵜も優も、両方ともギャフンと言わせなさい！」

……………。

「お前つて、ホンツツツトーに可愛くないよな」

「何か言つたかにや？」

「なんでもありません……」

俺は殴られた頬を押さえつつ、自然と笑顔になれた。

時間が経つて、放課後。

まだ少し怖い。でも、覚悟は十分に決まった。後は死ぬ気で頑張つて勝つだけ……何だけでも。

「このギャラリー何？」

「それは私も知らん」

「キヤー！ 鵜くーん！」

「鵜君頑張つてー！」

誰か一人ぐらい俺の応援しろよ！

「さあ張つた張つた！ 一口食券一枚だよ!?!」

あのヤロウ、どこで聞き付けやがった……。この地獄耳め！

「鵜君に3口!!」

「俺10口!!」

「っておい! 誰か俺にもかけるよ! 俺だけ真っ白じゃねえか!

と、思っていると、その声は聞こえた。

「一条楽に食券20口」

その声は決して大きくはなかったが、確かに俺の耳に届いた。

俺がその声の主……弥柳優に驚いた顔を向けていると、弥柳優は不敵に笑って――表情が変わらないので分からないけど、雰囲気ですんな感じがした――俺に向かっていった。

「何だ一条楽。ほんの少しでも勝てる可能性があるかもしれないんだろ? なら、やってみろよ。それで、俺のいったことを否定してみろ」

表情は変わらない。でも、その瞳は、まっすぐに俺を見ていて。何故だか熱いものが込み上げてきて、俺は叫ぶように言った。

「おう! ハニーと一緒に俺の良いところ見とけ!」

この時俺は、笑っていただろう。

この決闘、絶対勝つ。

そして、いよいよ決闘が始まった……のだが。

「銃使うのかよー!!」

「待てえ! 一条楽!」

誰が待つか! 普通に殴り合うのかと思ってたわ!

どうする? どうすればいいんだ!?

楽side終了

第5話 決闘3

俺が一人プールで待っていると、銃声と何やら叫び声が聞こえてきた。

そして案の定、楽と鶯が3階の窓から飛び降りてきた。

ドドボオオン!!

と、普段では絶対に聞かないであろう水飛沫をあげて、二人は着水。

プールサイドへ上がり、着水したであろう場所へ歩いて向かうと、ちょうど楽がプールから鶯を引き上げているところだった。

「大丈夫か？」

「うおっ！ ビックリした……。何だ弥柳か。まあ俺は大丈夫だけど、鶯は……」

「ああ、ダメだこりゃ。完全にのびてる」

鶯の顔を覗き込んで見ると、原作のように目をぐるぐる回していた。

「はあ……鶯は俺が運ぶから、一条楽は早く着替えてきな」

「ああ。でもどうせなら一緒に更衣室まで行こうぜ」

「ん」

軽く返事をしてから、鶯をお姫様だっこする。

「いや何でお姫様抱っこだなんだよ」

「濡れたくないからに決まってるだろ？」

「あ、はい……」

「こんな会話をしつつ、更衣室にたどり着く。

「さて、鶯を起こすか」

「は？ 別に起こさなくても更衣室で着替えさせたらよくないか？」

「……ああ、お前鶯が男だと思ってるのか？ 鶯は女だぞ？」

「……は？」

「だから、鶯は女。オーケー？」

「……マジで？」

「マジで」

「でも名前……」

「ああ、誠志郎って名前は偽名でも何でもなく、真正正銘本名だ。ただこいつは俺と同じ拾われた子でな。と言うわけかクロード様が鶯を男だと思つたらしく日本人の名前事典をパラパラめくってテキトーに名付けたんだつてよ」

「……あのメガネ」

「しかも10年たった今でも男だと思ってるからなあの人。笑えるだろ」

「……10年!？」

「ああ10年。鵜が女だと気づいたクロード様、どんな顔するんだろうな」

そのシーンは、まだ漫画でも見たことがない。最終巻で見れたのだろうか。

「なあ弥柳。鵜もつてことは、お前も拾われたのか?」

「うん? ああ、そうだよ」

「じゃあお前の名前もあのメガネが考えたのか?」

「うんそうだよ。優には名付けた理由があるけど、名字の方は鵜と同じでテキストに名付けられた」

「……ん」

と、不意に小さな声がして、鵜がゆっくりと起き上がる。

「お、起きたか」

「体は大丈夫か?」

「あ、ああ。一条楽に優か……。そうか、私は気を失っていたのか……」

何やら鵜の表情が優れない。大丈夫だろうか? 原作では特に問題なさそうだったが、もしかしたら何か体に異常をきたしたのかもしれない。

「おい鵜、大丈夫……」

「触るな！」

バシツ！ つと、伸ばした手が叩かれた。

「うおっ！ 何だよどうしたんだ？」

楽が素朴な疑問をぶつける。

しかし鶯は楽の言葉を無視して、俺を睨んできた。

いつもの光景に、俺は吐きたくなるため息をグツと堪えて、鶯に声をかける。

「鶯、取り合えずそこに更衣室があるから、脱ぐなりなんなりしてこい。着替えがないなら後でお嬢に着替え持ってきてもらおうから……」

鶯は返事をせず、ただフンツと鼻をならして、女子更衣室に入っていった。

「鶯のやつ、何でお前にあんな態度を取ったんだ？」

「いや、あれでもましになった方だぞ？ 昔は任務の時の必要最低限の会話しかしてくれなかったからな」

「……何か嫌われるようなことでもしたのか？」

「してない……と思うんだけどね」

そう言つて、俺は苦笑する。

いや、ほんとにこればかりは分からない。何故鶯に嫌われてるのか。そして何故最近少し口を聞いてくれるようになったのか。考えてみても分からない。

「そっか……」

「そうだ。……取り合えずお前も着替えてこいよ。そのままだったら風邪引くぞ?」

「ぶえつくしよん。……ズズ、そうする」

くしやみをし鼻をならしながら更衣室に向かう。しかし楽はドアを少し開けたところで、不意に立ち止まり口を開いた。

「あ、そうだ弥柳。お前に言われてから色々考えて、その時ふと思ったんだけど……」

「……何だ?」

「…………お前つて、人を殺したことがあるのか?」

「っ!!?……」

心臓が跳ね上がった。

すぐに落ち着かせたし、表情にも出ていないだろうが、いま、いきなり、そんなこと聞くか!?

「……あつ! いや何でもない! 今聞いたことは忘れてくれ! うわ……俺なんてこと聞いてんだ……。違うんだ、本当にちよつと疑問に思っただけで、つい口に出してしまったというか……取り合えず、忘れてくれ!」

楽のその物言いはすぐく必死で、確かに少し気が緩んで、思っていたこと、聞きたかったことがポロつと出たんだろうという風に捉えられた。

何か楽の慌てようを見ると、何だか笑えてくる。

「ハハハッ、気にしなくて良いよ。うん、そうだね。鶯は誰も殺してないから、安心して良いよ」

「……え？」

「あー、ダーリン！ 優ー！」

追い付いてきた千棘の声がして、俺は声の方に視線を向けた。



今俺は、弥柳から衝撃の真実を聞かされている。

まさか鶯が女だったとは……!! 男の制服着てるし、男みたいな名前しているし、屋上でのあの会話もあったし、てっきり俺は鶯は男だと思ってた……。

ていうか、あのメガネ……鶯が女だと気づいてないとかバカなのか？ ……いや、俺も気づけなかったから人の事いえないけど……。

しかし、二人ともあのメガネに拾われたのか。何て言うか、そんなことつてあるんだな。日本では考えられない。……って、二人とももしかして日本人じゃない？ でも顔立ちは日本人っぽいよな？ 日本語も普通に話せてるし……。

ま、いつか。

と、鵜が目を覚ました……んだけど、何でこいつ、こんなに弥柳に強く当たるんだ？
弥柳に聞いても分からんって言うし……意味わかんね。今度千棘にでも聞いてみる
か。

「……取り合えずお前も着替えてこいよ。そのままだったら風邪引くぞ？」

という、弥柳の言葉に素直に従うことにする。

確かにちよつと寒いし、鼻もむずむずしてきた。くしゃみも出目来たし、鼻も出る。
これは風邪を引いたかもしれん。

……あ、そうだ。俺弥柳に聞いてみたいことがあつたんだ。今ちようど二人つき
りだし、聞いてみよう。

「あ、そうだ弥柳。お前に言われてから色々考えて、その時ふと思つただけど……」

「……何だ？」

「……お前つて、人を殺したことがあるのか？」

……

……あれ？ 俺今何聞いた？

ぶわつと嫌な汗が全身から出て、体が急激に暑くなった。

は!! 俺今何言つた!! 「人を殺したことがあるのか？」 って聞いたのか!!

うわ嘘だろ!! 何てこと聞いてるんだ俺!! 最低だ! 兎に角、直ぐに謝らないと! 「…あ、いや何でもない! 今聞いたことは忘れてくれ! ……うわ、俺なんてこと聞いてるんだ……。違うんだ、本当にちよつと疑問に思っただけで、つい口に出てしまったというか……。取り合えず、忘れてくれ!」

つて、結局謝れてねえ!

直ぐに謝らないと!

そう思い、直ぐに口を開こうとしたその時には、弥柳が先に口を開いていた。

「ハハハッ、気にしなくて良いよ」

その言葉が聞こえてホッとしたのもつかのま。

「うん、そうだね。鵜は誰も殺してないから、安心して良いよ」

普段表情が変わらない優が、苦笑気味にそう答えた。

優が苦笑している、というところもそうだが、それ以上に気になることが。

(鵜は誰も殺してないから……。つて、どういうこと? ……それじゃあ、お前は……?)

そう思い、口を開こうとして。

「あ! ダーリン! 優!」

千棘の声が聞こえた。

声の方向に顔を向けると、千棘が手を振りながらこつちに歩いてくる。

ふと、隣にいる弥柳に視線を向けると、その顔はいつもの無表情に戻っていた。

これ以上話を聞いてよかったのか分からなかったし、うやむやに終わるような感じになって千棘には感謝だが、俺の心には大きなモヤモヤと、これまた大きな罪悪感が残り、胸の辺りが酷く痛んだ。

千棘が鶴の着替えを取りに行っている間に、弥柳が帰ると言って帰った。

引き留めたかったが、罪悪感があつたし、何より弥柳が「今の鶴には俺がいない方がいいだろう」と言ったから、呼び止めようもなかった。

千棘が戻ってきて、千棘の体操服を着た鶴が戻ってきた。

「む……優はどうした？」

「弥柳の奴なら帰ったよ」

「……そうか」

そう返事をした鶴の表情……あれは、どんな感情から来るものなんだろう。落ち込んでいるようで、でもそれに勝る勢いで怒っていて、でもその怒りの方向は弥柳だけに向いているわけではなさそうで……。

悔しくて、辛くて、逃げたしたい……。いろんな感情が混ぜ合わさった、そんな表情をしていた。

「…………で？ どーなったのよ決闘は？」

千棘のその声に現実に戻される。

「え？ ああ……………。えー……………つと……………う？」

チラツと鵜を見る。

すると鵜は俺に指を指して、こう言った。

「…………言っておくが一条楽!! 私はやはり負けてなんていないからな…………!!」

「あれ!？」

いや、お前気を失ってたし、あれは俺の勝ちだろう!？」

…………そのあと、結局決闘は無効ということになり、鵜の俺の処分は保留ということになった。そして俺はプール無断使用の反省文を書かなくてはいけなくなったのだった。

楽side

第6話

次の日の朝、何と鶯が女性用の制服で登校してきた！

……まあ知ってただけだ。

そして男ども、ザワザワうるせー。

「あ、あのお嬢……。いったいコレにどのような意味が……。何故私がこんな格好を……」

「わあー！ やっぱりによく似合うじゃない！ かわいいわよ鶯!!」

うん、確かに可愛い。今まで男の格好しか見たことがなかったから、何か新鮮。

「かつ。可愛いなどありません！」

「またそういうこと言う……鶯も女の子なんだからそれらしい格好しないとね！」

「必要ありません。私はお嬢を守り、お嬢との約束を果たすためにここにいますから」

「……ごめん鶯、その約束って何の事だっけ？」

「ああ、やはりお嬢は覚えておられませんか……」

覚えてるわけじゃないでしょ。10年前楽たちと出会っていたことすら忘れてるのに、そんな何気ない約束……。

「もおくそんな約束今まで大事にしてたの!？」

「私にとつては大切な瞬間だったんですよ……」

知ってる。だってお前ことある事に俺とポーラにその話してたしな。俺は睨まれながらだけど。

「あ、そうだ。鵜にコレをあげるわ」

そう言つて千棘が取り出したのは、原作通り大きなリボンだった。

「これでもう、男の子だつて間違われないでしょ?」

「お、お嬢…… お気持ちは大変嬉しいのですが、私にこんな女の子らしいものなんて……」

いや、お前女の子だし良いんじゃないやね?

「……あれ。……おー何だそのリボン似合つてんじゃない。可愛いな」

出たなハーレム野郎。「かわいい」とか恥ずかしくて直接言えない男子どもの怨めしい視線を集めていることに気づかず平和そうな顔しやがって。

「かわいくなんてない……!!」

顔を真っ赤にして叫ぶ鵜。

かわいい(確信)。

何て思ってたなら、何故か鵜が俺の方を睨んできた。

「……………え？ 何？ 俺にどうしろと？ 俺に感想求めてるの？ 正直似合ってるけど、こうして現実で見るとリボンがでかすぎると言うか、存在感が半端なくて俺からしてみれば違和感がちよつとあるのだが……………」

……………。

「……………まあ、良いんじゃないの？」

「……………良くない！」

……………切れんなよ。

その後、鵜はすぐに男性用の服に着替えてきた。



所変わつてとある場所で、俺は鵜と一緒に目隠しをし、クロードの合図を待っていた。「……………準備は良いか？ ………………始め！」

その言葉が紡がれると同時に、目の前のテーブルの上にある物体を触り……………次の瞬間にはそれを組み立て銃を完成させると構えて待機。

少し待つこと、鵜も銃を完成させて構えた。

「ふむ……良いタイムだ。腕は落ちていないようだな。……ところで、例の集英組の二代目の様子はどうか？ 何か掴めそうか？」

「……いえ、今のところは何も」

「そうか。優の方は？」

「私の方も今のところは」

「……そうか。やつがお嬢の本当の恋人ではないと100%断定できたら、やつを即刻処分しろ。分かっているな……？」

「もちろんです……!! あんな無礼なグズ野郎!!」

酷い言葉ようである。

「ほう、お前も奴の事が分かってきたようだな。……兎も角、頼むぞお前たち」

そう言うと、クロードは部屋から出ていった。

俺も出ていこうとすると、鵜が声をかけてくる。

「優……」

「……何だ？」

「……お前の言った通りだった。私は決闘に負けた」

「……そうだな」

「……………あいつに言われたのだ。『お嬢は私が守るだけで収まるような、柔な存在ではない』と……………。優はどう思う」

「……………俺も、その通りだと思うぞ。お前もクロード様も、過保護が過ぎてやるのが空回りしている……………そう感じることは、多かった」

「……………そうか」

「……………ああ」

「そうか、そうか……………。私は、お嬢のことをしつかり見ていなかったのか」

それは違う……………。と言うべきだろうか。確かに空回りしていることはあったし、偏見とか先入観とかがあって逆に迷惑をかけたりとかしていたことはあった。特にクロード。お前のせいでお嬢は友達が出来なかったようだぞ（原作知識）！ただ、それでも決して見ていなかったわけではないし、お嬢のことを思つての行動であったことは知っている。

考えが纏まらない内に、鵜が口を開く。

「お前も……………そうなのか？」

「……………ん？」

「私は、今回のことで少し視野が広くなったとか感じている。だが……………」

そこで、鵜は顔を伏せると、小さく呟く。

「私は、お前が何を考えているのか、分からない」

「……………え？」

聞こえなかったわけではない。ただ、何を言われたのか、今一理解できなかった。

鵜が顔を上げ、しっかりと俺の目を見ていった。

「私は、お前が何を考えているのか、分からない」

それだけ言うと、鵜は立ち上がり部屋から出ていった。

俺はその後ろ姿を、ただただ見つめていた。どこか小さな鵜の背中を、その言葉が何を意味し、何を伝えたいのかを呆然と考えながら。

何故か動かない体に、心拍数が上がるのを感じながら。

第7話

俺と鵜が転校してきて今日で3日目。今俺たちはお嬢の友人である小野寺と宮本に改めて自己紹介をしていた。

「ーそれでは、改めまして自己紹介を。鵜誠志郎です。名前は男のようですが、正真正銘女です」

「弥柳優です。以後お見知りおきを」

「お二人はお嬢のご友人だと聞きました。日頃お世話になっているにも関わらず、ご挨拶が遅れて申し訳ございません」

「私からも、申し訳ございません」

「いえいえそんな…！でもびっくりしたよー。私も鵜さんのこと男の子だと思ってたから…」

「そうなの？ 私はわかってたけど」

「そーなの?!」

そんな二人の会話を微笑ましいものを見る目で眺めていると、教室の前の扉が開き、舞子集が教室に入ってきた。

「おはよー桐崎さん!! 今日もかわいいねー!」

その言葉を聞いた瞬間、鶯がどこからともなく銃を取り出すと舞子の頬に突きつけた。

「何だ貴様は、お嬢に向かって馴れ馴れしい……!!」

「こらこらこらこらこら!! その人も一応友人だから!」

「……一応なんですね」

「……………友人よ」

「その間は一切……」

「弥柳優くん……だよね?」

俺がお嬢にツツコンでいると、小野寺が話しかけてきた。

「はい、合ってますよ」

「あ、良かった。……………弥柳君は、女の子じゃないよ……ね?」

その間に思わず苦笑を浮かべる。

「違いますよ、普通に男ですから」

「そ、そうだよね。ごめんね? 変なこと聞いて」

「いえ、構いませんよ。鶯の後だとそう思われても仕方がないですから」

「全く……見たら分かるでしょ」

「る、るりちゃん……」

「えつと……」

本当は名前を知っているが、確か直接名乗られたことはないはずなので、知らないふりをする。

「宮本よ。宮本るり。よろしくね」

「あ！ 私は小野寺小咲！ よろしくね、弥柳君！」

「宮本さんと小野寺さんですね、よろしくお願いいたします」

そう言うやいなや、深々と頭を下げる。

「ちよつ、そんなにかしこまらなくてもいいよ！」

「そうね。歳も同じなんだし、敬語じゃなくてもいいわよ」

「いえ、お嬢のご友人ですので。………これからお嬢のこと、よろしくお願いします」

「当たり前だよ！ 千棘ちゃんとは友達だから！」

「そうね。別に私たちが友達になりたいから友達になったのだし、お願いされるまでもないわ」

………本当にこの人たちは、良い人たちだ。

「ありがとうございます」

「弥柳君もだよ……？」

「……………」

言われた意味が分からず、首をかしげる。

「弥柳君も、もう私たちの友達だよ？」

「そうね。今改めて自己紹介したばかりだけれど、少なくとも私たちはあなたのことを友達だと思っているわ。だから、敬語はやめて欲しいのだけど……」

ニコニコニコニコ。

じつ……。

「ぜ、善処します……」

「……………」

「と、ところで、宮本さんはどうやら鶯が女の子だと気がついてたみたいですが……」

「あ、そうだよるりちゃん！ どうして気づいたの？」

「どうしてって……見たら分かるでしょ」

「わかんないよ！」

「俺も普通は分からないと思いますが……。そういえば宮本さんの他に、先生と……あちらの眼鏡をかけた、鶯に銃を突きつけられている方も、鶯が女の子だと気づいてましたね」

「えっ、そうなの!？」

「はい。そのようでした」

「? 何だ? 小野寺が何か考え事を始めた。」

「……るりちゃん」

「何かしら?」

「……そのめがねちよつと借りてもいい?」

「は? 何で?」

「いや……なんとなく……」

あー、確かに鶯が女の子だと気づいた人はみんなメガネかけてるわ。

「小野寺さん、分かりますよその気持ち」

「だよね!」

「はい。鶯が女の子だと気づいたのはみんなメガネをかけてるい方ばかりですしね、何

かメガネに秘密があるのかと……」

「そんなものはないわよ……」

物凄く呆れられた。

「それは兎も角……鶯さん、女の子にすごい囲まれてるわよ」

宮本の言葉に後ろを振り替えて見てみれば、確かにクラス的女子に囲まれて色々と質問されていた。

あ、鵜と目があった。

鵜が目で語りかけてくる。

(優……!! 助けてくれ!)

(……無理だな)

(な、何故だ!?)

(いや、俺にその空間に入り込んでいけど? 無茶言うな)

何てアイコンタクトで話していると、鵜の周りの女の子が鵜の視線を追って俺を視界にいれた。

……嫌な予感が。

「えー何々!? 何で弥柳君と見つめあってるの!? もしかして彼氏だったり!」

一人の女子のその台詞に、一気に場の空気が盛り上がる。

「「きゃー……!!」」

「ち、違います!! 優とはそんな関係ではありません! ただ、ちよつと目で会話していただけですの!」

鵜……それはいつちやダメなやつ。

「目で会話!!」 すごいそんなことできるんだ!」

「二人ってそんなに仲が良いの!」

「信頼しあつてる……みたいなの？」

「「きゃー……!!」」

もう何でも良いのな……。

「いえ、別に信頼してるとかそう言うのはあんまりなくて、ただ付き合いが長いというか……」

「どのくらい？」

「9、9年ぐらい……?」

「9年!? それって幼馴染みってこと!？」

「あゝ美男美女の二人の幼馴染み」

何か語り出したんだけど。そして周りがそれに合わせてまた語り出す。

「二人はとても仲が良く、何時もどこでも一緒だった」

「しかしそんな二人はあまりの仲の良さに、自分の気持ちに気がつかない!」

「そして9年目にして自覚し始めた恋心!」

「この気持ちを伝えたい! でも伝えたら、これまでの関係が壊れてしまうのではないかという不安!」

「「そんな、関係! きゃー……!!」」

「ないから」

…思わずツツコンでしまった。

というか、妄想力すごいな。あと、何でも恋愛に繋げるな。

「ゆ、優……！ 助けてくれー!!」

涙目で助けを求める鶯。

そのさまに思わず苦笑しつつ。

「小野寺さん、宮本さん。ちよつと行ってきますね」

「う、うん。行ってらっしゃい」

「あなたも大変ね……」

——と、そんな感じで、日常は過ぎていった。



「クロード様」

「来たか……」

時は放課後。俺は今ビーハイブの屋敷でクロードに呼び出されていた。鶯？ 鶯は一条楽と二人で飼育係のエサを買いにいつている。

「何の御用でしょう」

「いやなに、もう少しで林間学校があるだろう？」

「はい、ありますが……」

「ドラゴンヘッドの残党に動きがある」

ピクリと指か反応し、目が鋭くなる。

「確かな情報で……？」

「いや、あまり情報が漏れてこないため、あくまで可能性の話だか、十分に注意してくれ」

「そうですか」

「ああ……。だか逆にここまで情報が漏れてこないとなると……」

「可能性は高い……と？」

「ああ。もしそうなら、狙いはお嬢か……お前だ」

「そう……でしょうね」

ドラゴンヘッド。とある国のかなり大きなギャング組織。かつて俺が壊滅させたが、残党を狩り尽くすことが出来なかった組織だ。

「もしやつらが来た場合、出来る限り捕獲してくれ。もしお嬢に手を出すようなら、殺しても構わん」

「畏まりました。頼はこの事を？」

「知らん。伝えるかどうかはお前に一任する。お前の腕なら一人でも事足りるだろうか」

ら、鵜には普段通りにしてもらっていても構わん」

「了解です」

「話は以上だ」

「はい、それでは失礼いたします」

クロードの部屋を出て、自室へ向かう。

ドラゴンヘッドか……。どうしたものか。

そんなことを考えていると、ドアがノックされた。

「はい」

「優……入ってもいいか？」

「ああ、いいぞ」

そう言うのと、鵜が恐る恐る部屋に入ってくる。

「どうした？」

「その、少し聞きたいことがあってだな……」

聞きたいこと？ ……ドラゴンヘッドのことか？

「その、今日出掛けてから少し体の様子がおかしくて……。ある条件下のみ体に変調が現れるという今までにない経験のもので……」

……ん？

「……具体的に？」

「特定の人物の前でのみ動悸が激しくなって、胸も苦しくなって顔も熱くなり、その人物の前では会話もまともにできない有り様で……」

「……………」

あー……それってあれだ。”恋”だな。原作通り一条楽に恋しちやたかー。

「……聞いたこともない症状だな。クロード様やお嬢、小野寺さんや宮本さんに聞いてみてはどうだ？」

「……む、そうしてみる。世話になった」

「ああ」

それだけ言うと、鵜は部屋を出ていった。

……うん。鵜にはドラゴンヘッドのことは言わないでおこう。何やら病気にかかっているみたいだし（棒

それにもしかしたらあの時みたいに本気でキレるかもしれない。あの姿は、あんまり人に見られない方がいいだろう。

転校してきてばかりなのに、もしかしたら学校にいれなくなるかも知らないからな。俺はふうと小さく息を吐くと、林間学校へ向けての準備と、武器の準備を始めた。

第8話 林間学校

土曜日。

林間学校当日。俺は静かに荷物の確認をしたあと、リボルバーを右の腕に仕込み、近接戦もできる頑丈な投擲用ナイフを系8本、それぞれ両足の足首辺りに1本ずつと、制服を改造し作ったナイフ用ポーチに左右それぞれ3本ずつしまう。

それぞれ緊急時に動きを阻害しないか、リボルバーはちゃんと手元までくるかなどを念入りに確認し、特に問題がないことを確認。全身鏡で周囲から自分を見たときに、武器が仕込まれていると気づかれないかも確認。特に鞆に気づかれるわけにはいかないからな。

「……よし、問題ないな」

確認が終わると荷物を持ち、部屋を出る。

部屋を出ると丁度隣の部屋から鞆が出てきたところだった。

……そういえば話してなかったが、俺は今独り暮らしをしていて、部屋は原作の鞆の部屋の隣となっている。

屋敷には基本的にクロード様と呼ばれたときや、訓練や鍛練の時にいくぐらい。その

際わざわざ帰るのも面倒なので、屋敷の自分の部屋に泊まるのだ。この間鶴が謎の症状（恋）について聞いてきたのが、その部屋である。

「おはよう鶴」

「……おはよう」

「体調はどうだ？」

「……何の話だ？」

「いや、何かある特定の人物の前だと動悸がどうか……」

ふと鶴の顔を見ると、顔を真っ赤にしている。

ああ、小野寺さんや宮本さんに、それは「恋」だと言われたのかな？

と、鶴がどういう状態なのか知りつつも、知らんぷりして話しかける。

「お、おい……顔が赤いぞ？ どうした？ やっぱり体調が悪いのか？」

「うううえるさい！ いいから行くぞ！」

「お、おう……」

どうやら体調はまだ悪いようである。

学校に着くと、もう既に大勢の学生が集まっており、バスも止まっていた。

着いてそう時間が経たないうちに、先生の「よし全員班に分かれて集合〜！ バス

で移動するよ〜!」というかけ声がし、俺は班員のところにいつてバスへと乗り込んだ。さてさて、バスの席は原作だと一便後ろの5人席に楽とヒロイン達が座るといふ展開なのだが、この世界でもそれは変わらず、原作通りの席だった。

具体的にいうと、バスの一番後ろの5人席に、右から鶴、千棘、楽、小咲、るりという席。そして集はその前で、今楽に向けて親指を良い笑顔でたてている。

さて皆さん。原作を読んでいるとき、少しばかり疑問に思ったことはないだろうか。――宮本がそこにいるのなら、集の隣は誰なんだろう?……と。

私だ。

……一から説明すると原作通りに6人班で班分けをしたわけだが、原作に本来いないはずの人物、すなわち俺のせいで1人だけあまり、どこか1つが7人班にすることになった。

班決めの時はどこでもいいやと思つてずっと寝ていた(お嬢も寝てたから良いかなつて思つた。反省はしてない)ら、いつの間にか俺は楽達の班員にされて、尚且つ座席を決める役割があつた集により、俺は集の隣に座っている……というわけだ。

正直、あまり集とは話してないため、何を話したらいいか分からない。

………寝るか。

そう思い、いざ寝ようとしたとき、舞子が話しかけてきた。

「いや、楽しいですな〜旦那」

旦那………とは、俺のことだろうか？

「あ、ああ………そうだな」

確かに仕掛人からしたら今楽の状況はさぞ楽しいのだろう。クラスの男子などみんな楽を睨んでは呪いの言葉を紡いでいる。

「一条は大変だな。舞子、もう少し手加減してやったら？」

「だいじょぶだいじょぶ。楽とは親友だからな。それよりも、俺のことは集でいいぜ」

「………考えておこう」

「あらら………」

そう言うや、集は楽たちの様子を見るために乗り出していた体をもとに戻し、俺の方を見てきた。

「まあそれは追々でいいや。それよりも、俺たちあんまり話したことなかったよね。だからちよつと話してみたいと思ってさ、隣の席にしちやたぜ！」

といつて、親指をたてる。

「確かにあんまり話したことないな。何か聞きたいことでもある？」
「ぶつちやけ、誠士郎ちゃんとの関係は？」

いきなりだな。

「……関係……とは？」

「んもう、分かつてるだろ？ 付き合ってるの？」

「……わざわざ聞かなくても、分かつてるだろ？」

俺がそういうと、集は一瞬きよんとしたが、すぐに笑顔になった。

「まあね。二人がそういう関係じゃないってのは、見ていたら分かるし」

「だろうな。お前は見ていないように、実はよく人のことを見てる。鵜が女だって気づ

いてたしな。……一条に教えてやればいいものを」

「ありや、気づいてたんだ。楽に教えなかつたのは、面白そうだったからだよ」

「……なるほど」

思わず苦笑してしまう。知ってはいたが、なるほど、舞子は良い性格をしている。

「ん、じゃあ質問変えるね。誠士郎ちゃんとはどういう関係？」

「……質問、変わってなくないか」

「いゝからいゝから」

「……仕事仲間？」

「仕事？ 何の？」

「一条から聞いたりしてないのか？」

「まあそれなりに」

「じゃあ何となく分かるだろ？ 言えない仕事だよ」

「ふむふむ、なるほどなるほど……」

何がなるほどのだろうか。

何て思っていると、表情に出ているのか、集が俺の顔を見て口を開く。

「いやな、たまたま桐崎さんと誠士郎ちゃんが話してたのを聞いたんだけど、誠士郎ちゃんが『優が何を考えてるのか分からない』って言ってたんだよ。だから気になってね」

「そうか。……お人好しなんだな」

「そういうのじゃないよ。ただ、俺の目標にしているやつなら、こうするかなって思っただけ」

「……そうか」

確か、集が目標にしているやつって……。

なるほど、やつなら聞いてきそうだ。

「じゃあ、質問変えるね。誠士郎ちゃんのこと、どう思ってるの？」

どう思ってる……か。

……今までそんなこと考えたことなかったな。俺は鶯のことをどう思ってるのだろう。

取り合えず、表の世界で生きて欲しい。殺しはしてほしくない。この2つは絶対。でも質問の答にはなっていないよな……。

ふと、脳裏に懐かしい1人の少女の姿が浮かんた。もうその少女の顔も、はつきりと思いつけなくなってしまうが……。

「……………」エリー」

ぼろっと、本当に小さな声がこぼれた。

「……………」エリー？」

「……………」

集の言葉に、ハツとする。

……どうやら無意識に名前を呼んでいたらしい。

「……………」いや、なんでもない」

しかし、何故今このタイミングでエリーのことを思い出したのか……。

ああ、そうか。どうやら俺は、鶯のことをエリー、すなわち守るべき妹のような存在だと思っっているらしい。

「そうだな。鶯は俺にとって、妹みたいな存在……なのかもな」

俺の実年齢も知らないのに、何をいつているのだろうな。

「ふむふむ、妹……か」

集はそう口にする、何やら考え始める。が、それもそこそこに別の質問をぶつけてきた。

「じゃあさ、好きな食べ物は何？」

「……いきなり普通になつたな。もつと鵜のことを聞かなくてもいいのか？」

「うん。別にいいよー。あんまり聞くのも悪いしね。それに俺は優のことを知りたいからさー」

「……そうか。好きな食べ物は……特にないな。食べれば何でもいい」

「マジで？ 嫌いな食べ物とかないの？」

「嫌いな食べ物……」

昔食べてた、カビが生えて泥水をたっぷりと吸い上げたパンとかは嫌いだけど……それは違うよな。

「……ないな」

「マジか。じゃあさ、何か得意なこととかある？」

「得意なこと……」

……殺し？ ……射撃に投擲、近接戦。……あつ。

「……色んな国の言葉を話せる。英語にフランス語、ドイツ語にロシア語」

「……マジか。俺は英語ならできるけど、さすがにそれしかできないわ」

「いや、英語ができるなら十分だろ」

「それもそうか。じゃあさー」

そんな感じで、何気ない質問をひたすら聞かれ、俺はその質問にひたすら答えていた。すると、思い出したように集が口を開く。

「あつー！　そういえばなんだけど、桐崎さん料理が下手っていうことを楽に聞いたんだけど、桐崎さんの料理食べたことある？」

その質問に、過去の記憶を遡って……。

「ああ、一応あるぞ。何かお嬢がみんなに作ったバレンタインチョコのあまりを食べたことがあるな」

「お、それはどうだった？　不味かったか？」

俺はその時の記憶を思い出してみるが……。

「いや、普通に美味しかったぞ？　確かにちよつと固かったりしたけど」

「あれ？　……おつかしいな。楽の話によるとお粥作るときに小野寺と黒酢とかレバーとか、納豆にひじきと明太子、栄養ドリンクにお味噌とか入れてたって話を聞いたんだけど……」

「何それ怖い」

そんな会話を集としていると、バスは目的地に着いた。

二人が話している間後ろの方の席では楽達がそれはそれは楽しそうに叫んでいた。

因みに、いつの間にか舞子を呼ぶとき「集」と呼んでいて、それに気づいていない優をみて、舞子がニヤニヤしていたのは、また別の話。

第9話 林間学校2

バスを降りると、宮本以外の4人が、まるで100メートルを走ったあとみたいになっていて。

「どうだった？俺のセッティングしたスバラシードライブは？」

はらいて…と、笑いながら楽に話しかける集。

お前、ホント良い性格してるよ。

お嬢はお嬢で何か顔赤くしてるし、鵜にしては珍しく肩で息をしてる。小野寺に関しては顔を赤くしながら宮本の鼻を摘まんてる。

……何このカオス。

何て思っていると、先生が声を張り上げる。

「よーし みんな聞けよー！ プリントにも書いてるけどお前らは今から近くのキャンプ場で飯盒炊飯とカレー作りだ。楽しんで作れよー！」

「「あー」」

ピクツと楽が反応する。

「小野寺と宮本は薪をもらってきてくれ」

「はーい」

「桐崎、お前はここで俺が指示する。勝手に動くなよ」

……必死だな楽……。

「なあ、楽」

「ん？ どうした集」

「桐崎さんと小野寺の二人で、小さい鍋でカレー作ってもらわね？」

「ばっ！ おま……！」

楽は素早く集の側によると、誰に間聞こえないように耳元で話しかける。

「バツカお前、前に話したろ!? 二人に料理させちゃダメなんだよ！」

「でも、バスで話してただけど、優曰く普通に美味しかったらしいぞ？」

「マジで……? 優、美味しかったのか？」

「ああ、普通に食べたけど……」

「なあ楽、もしかしたらお粥がヤバかったのは色々と変なものを入れたからで、意外とレシピ通りだと旨いんじゃないやね？ それにほら、ここじゃあ余計なものを入れることなんて

出来ないだろ？」

「……まあ、確かに。……でも小さい鍋なんてどこにあるんだ？ それに先生が許可し

てくれるとも思えないし……」

「そこはだいじょーぶ！ 既にキョーコちゃんには許可もらったし、それようの鍋も貰ってきた！」

「準備良いなおい！」

「キョーコちゃん、何か面白そうだから許可するって」

「何言ってるんだあの人……」

と、いうことでお嬢と小野寺の二人で料理をしてもらうことになりました。

その間お嬢が楽にお湯をぶっかけてたりして、何やかんや色々あったが、カレーは無事に完成した。

……お嬢と小野寺が作ったやつ以外。

「……何、コレ」

と、楽。

「……何か、固いね」

と、集。

「……固形ね」

と、宮本。

「……お嬢……」

と、鶇。

「……日本のカレーは固形なのか。……知らなかった」

「「いや違うから!!!」」

突っ込まれた。

いや、でもコレは……。

「うん、取り合えず言えることは、コレはカレーじゃない」

「「同意」」

楽の言葉に、即効で同意する。

いやだって、ルーが固形で楕円形の形していて、その上に丸くご飯が乗ってるんだぜ？ しかも盛り付けは小野寺がやったからかやたらと旨そうに見える不思議。因みにルーの色は茶色ではなく、紫に近い何かマガマガとした色をしている。

……もうコレ毒じゃね？

小野寺は可愛くうつ向き、お嬢に関しては半分涙目である。

「……これ、誰が食べるの？」

「……楽、逝け」

「待て集！ 字が違うから！」

まさかここまで酷いとは……。いや待て、忘れてたけど、そういえばお嬢はマリカとの料理対決の時、卵かなんかを正方形の物体Xか何かにしてたっけ？

……錬金術かな？

まあ、別に食べられない物を入れてなかったし、食えるだろ。

「……!! ま、待て優！ 死ぬぞ！」

いや、死にはしないでしょ……。たぶん。

俺は上につてるご飯を少しとって端っこに持っていき、そのまま固形のルーと一緒にかぶりつく。

バリンボリンバリン。

……俺今何食ってるんだっけ？

やたらと固い。味の方は……。うん、何か言葉にできない味だ。だけどまあ……。

「……ど、どうだ？」

楽がたまらず聞いてくる。

「うーん、味の説明は出来ないけど……。まあ普通に食べられるかな」

俺の言葉を聞いて楽達は嘘だろ……。って表情を浮かべ、お嬢は嬉しそうにはにかんだ。

「でっしょー！ 確かに見た目はあれだけど、私だっちゃん料りでできるんだから！」

「あの、お嬢……」

「マジかよ……。なら俺も少し食べてみるかな」

「あ、一条楽、やめておいた方が……。優の味覚はー」

バリンボリンバリン。

バタツ。

「楽ー!?!」

「一条君!?!」

「ダーリン!?!」

お嬢の料理を食べて楽が白目を向いて倒れた。

「……優の味覚は狂ってるから、優の言葉は信用しない方がいいですよ」

「それを早く言つてよ誠士郎ちゃん!」

そう言いながら集が水を楽に飲ませる。ただ、口元がひくひく動いているのを見逃さない。

……あいつ、笑いを必死にこらえてやがる。

「……ばっ!あれ? ここはどこ私は誰?」

「ダ、ダーリン!?!」

「お、おおうハニーか。……やつべえ、マジで死ぬかと思った」

バリンボリンバリン。

「大丈夫か？ 一条楽」

「お前、食いながら聞いてくるなよ……。とうか優！ お前それ食って何で平気なんだよ！ 俺見てはいけない川まで見たんだぞ！」

「何でって……。そこまで酷くないだろ。別に食えないものが混ざってるわけでもあるまいし」

「いや、コレはもうそういう次元の話じゃない！ お前普段どんなもの食ってるんだよ……」

そんな疲れた顔しなさんな……。

普段食ってるのは……

「コンビニでテキトーに済ませる」

「コンビニかよ……。ちゃんと栄養とれよ」

「何、別にカビが生えて泥水をたっぷりと吸い上げたパンよりかはマシだろ？」

「あく、確かにそれよりかは……。っは？ 今なんて？」

何気ない会話に、何気ない感じで言われたとんでも発言に、一瞬理解が追い付かなかった楽。それは鶴以外の班員全員に言えることだった。

優は楽が何を聞き返してきているのか理解できず、首をかしげながら答える。

「いや、だからカビが生えて泥水をたつぷりと吸い上げたパンよりかはマシだろ？
つて」

「……それを、食ったことがあるのか？」

「……寧ろないのか？」

とまで言つて、ああ、と理解した。

ここは平和な日本だった。

「あく……うん、今言つたことは忘れてくれ、うん。取り合えず、コレは俺が全部食べるけど、いいよな？」

「えっ？ ……ああ、うん」

その後、少し沈黙の中カレーを食べていたが、集が機転を利かせて話を盛り上げ、普段と変わらない雰囲気での楽しい食事となった。

食事の後は片づけを済まし、いよいよ宿泊する旅館へと向かった。

優に対しての疑問や心配などといった、複雑な気持ちを胸に抱えながら。

第10話 林間学校3

「おお〜！ ここが今日俺たちの泊まる部屋か〜！」

「思ってたより広いね〜」

「こういうところウチのガツコ気前いいよな〜」

まあ7人で泊まるんだし、そこそこ広くないと無理だよな、っていうツツコミは控えておこう。

「その上ふすま越しとはいえ女子と同じ部屋で寝られるなんて……。俺この学校に入つてホント良かったよ…!!」

「…正直なやつだな」

「本当にな」

というか、この学校本当になんで同じ部屋で男女泊まらせるんだ？ 意味わからん。間違いが起こつたらどうするつもりなんだろうか……。

「…ところで舞子くんはベランダと廊下どっちで寝るの？」

「あれ!? 部屋で寝ちゃだめ!」

宮本のやつ、容赦ないな。……よし、ここは俺も一つ……。

「何をいつてるんですか、宮本さん……」

隣で集が「おお！」とか言いながら目を輝かせて俺を見る。

大丈夫。分かってるって。

「集はベランダで寝るに決まってるでしょう?」

「あーそっかー」

「優!?!」

「……あれ? 弥柳、いつの間に集のことを名前で呼ぶようになったんだ?」

楽に言われて、気づいた。

「……あれ、本当だ。いつからだろう」

「バスで話してるときに名前呼びに変わったよ〜♪」

「マジか舞子くん」

「あれ!?! もとに戻った!?!」

何か集を弄るのは楽しいな。

「冗談だよ」

「優は顔が無表情だから、分かりづらいんだよ」

「ごめんて舞子くん」

「冗談なんだよね!?!」

冗談だよ冗談だよ。

「へえ〜……。なあ弥柳、俺も優って呼んでもいいか？」

「いいよ。俺も一条楽って呼ぶな！」

「変わってねえよ！」

「冗談だよ楽」

「…………無表情だからわかんねえよ」

「さ〜てどうする？ まだ結構時間あるしせつかくだからトランプでもやんない？」

あ、このイベントは…………。

「普通にやってもつまんねえし負けたやつは罰ゲームってのはどーよ？」

「…………罰ゲーム？」

「負けた人は自分のスリーサイズ」

ガシッ!!

「すみませんウソです」

宮本早いな…………。

「じゃあじゃあ今日の下着の色を」ドス

「自分のセクシャルポイントを」ボゴ！ ガスッ

「体を洗うときまらずどこから…………ギャー！！」ドゴバキツズドツ

「「「……………」」」

毎度お疲れ様です宮本さん。

「初恋のエピソードを語るとか…」

「…まあそのくらいなら」

「「「えっ…」」」

（（（は…初恋のエピソード…!!?）））

千棘、鶯、小野寺、楽の4人が顔を赤くする。

その4人の様子を見て苦笑するも、はてきて、俺もどうしたことか。

恋なんて一度もしたことがない。

「なあ集。俺別に恋したことなんてないから、そんなエピソードなんて語れないぞ」

「優、それマジ?」

「マジマジ」

「あく…じゃあどうしようか」

「な、なら集、違う罰ゲームにしたらいんじゃないかな!」

「そ、そうね! もし優が負けたとき罰ゲームがないのはずるいものね!」

「そそそ、そうだよね! 舞子くん、罰ゲーム変えよう!」

「わ、私も別に恋なんてしたことなんてナイシ…してないし!」

4人共必死すぎ。

「うくん……。あつ、じゃあ優には「エリー」って子の話を聞かせてよ！」

「「「えりー?」」」

お嬢、小野寺、宮本、楽が声を揃える。

「うん、バスで話してたときちよろつと出てきたから、気になって」

鵜は表情を固くする。

「おい貴様、それは——」

「別にいいけど……」

鵜が驚いた表情を向ける。

「いいのか?」

「うん、別にいいよ」

「どうしたの?」

「いえ、何でもありませんよお嬢。……エリーのこと話してもいいけど、あんまり聞いてて気分のいいものじゃないと思うけど、いい?」

「うくん、まあ負けた時だから別に絶対って訳ではないし、もしあれなら優だけまた別の罰考えるってことでいい? あんまりゆつくりしてると時間がなくなるし」

「分かった」

そんなこんなで始まったトランプ。結論からいうと俺は1位であがった。そして残ったのは原作通り千棘と楽。どうやら二人とも原作通り、楽は小野寺の、お嬢は楽のババを全部引いたらしい。

ま、あんだだけ分かりやすかったらね……。集なんてずっと笑ってるし……。そして決着も、原作通りつかなかった。

夜。すべての行事が終了し、後は風呂に入って寝るだけになった。

「…はく食った食った。んじや風呂にいこう〜ぜ〜」

「…覗きでもしようとか言わねーだろな」

「言わないって！ 俺もいつまでもガキじゃねーし、それに男子と女子の入浴時間は違うんだし」

「……それもそうか。優も行くだろ？」

「あ、いや俺は部屋の風呂を使うわ」

「えっマジで？ もったいないね〜」

いや〜、だって身体中に傷ありますから。切り傷刺し傷銃弾のあと、結構生々しいもので。流石に気をつかう。

それに、ドラゴンヘッドがいつ仕掛けてくるかわからないから、宿の間取りと周辺地

図を頭に入れておきたい。一応時間があるときにしていたが、まだ納得できるものじゃないし。

……楽の女湯浸入事件が起こるけど、ま、いつか。クロードに先にあって押さえておけばいいだろう。

「おーい一条、フロントに電話かかってるぞ」

「え？」

楽が電話に出に行くタイミングで、俺も部屋の風呂へと向かう。

そして風呂に入っているとときに気がついた。

(……あれ？俺ここにいたら楽が女湯に入るの防げなくね？)

……………

無言で風呂から上がり、袴に着替えると廊下に出て温泉へむかう。

「ねえママ、あの怖い」

「しっ、見ちゃ行けません。早く行くよ」

という、一般宿泊客の親子の会話が耳に入った。ドラゴンヘッドの連中か？と思

い、そいつを見てみると……。

そいつはマツサージチェアに座り込み、ガガガガとかなり強く動かしながら、元々凶悪な顔をさらに悪い顔にしながら高笑いを決め込んでいる、どこからどう見てもヤバ

イ男だった。

……というか、クロードだった。

ちよつとあの俺の知り合いなんですけど。さらにいつてしまえば命の恩人なんですけど。

「……何してるんですかクロード様」

「む？ おお、優か！ 丁度いいところに来た！ 少し話を聞いていけ！」

「はあ、それは別に構いませんが、もう少しその、落ち着いてください。周りの人たちに怖がられてますよ」

「……む、それはいかんな。少し落ち着くとするか」

少し落ち着いたところで、クロード様が自慢げに話し出す。

「優、あの小僧を社会的に抹殺してやったぞ」

「小僧……というのは一条楽ですね？ 具体的には何を？」

「女湯に騙していれてやったのだ。フハハハハ、ザマーミロクソガキめ！ 貴様は今日より変態覗き魔の烙印を押され、暗く閉ざされた青春時代を送るのだ……！」

あー……やっちゃいましたか……。

クロードは俺がなんの反応を示さないのに気づき、声をかける。

「どうした優」

「……なにやってるんですかクロード様」

俺のその言葉に、クロードがその目付きを鋭くする。

「どういう意味だ。まさか貴様、あのクソガキは友人だとぬかすのではあるまいな」

「違いますよ。クロード様、ちよつとしつかり考えてみてください。自分が何をしたのか」

「……………何が言いたい？」

……………どうやら本当に分かってないらしい。

「あのですねクロード様。クロード様はお嬢の”裸”を、一条楽に見せたことになるんですよ?」

目をぱちくり。そしてさっさと青くなっていく顔。

わー、人ってここまで顔を青くできるんだ。

顔を青くしたまま固まったクロード。

「今回はクロード様が悪いですね。お嬢に嫌われても、俺は知りませんからね?」

それだけいうと、俺はその場を離れた。

さーて、それでは周辺地理の把握へといきますか。

第11話 林間学校4

外を徘徊していると、楽とお嬢が向かい合っているところに出くわした。

………何してんだ？

「……………」

「……………」

遠くで何を話しているのか聞こえない。気にはなるが…果たして聞いてもいいものなのか。

なんて思っていると、次の瞬間お嬢が叫んだ。

「見たんですよ!? 私の!! このパーフェクトボディ!! 信じらんない!! あんな…!

一糸まとわぬ姿をあんたなんかに見られるなんて!!」

わー!! と、言いたいことを叫んだお嬢。

ああ、なるほど。あのシーンか……。何か気にして損した。

大方周辺地理も把握したし、俺は部屋に戻るかな。

………って、思ったんだけどなあ。

俺は視線をお嬢たちの背後の森の、少し離れたところへ視線を向ける。

ここからははつきりと視認することはできないが……まず間違いない、誰かいる。

何故気づけたか。それは一步引き、全体を一枚の完成された絵を見るように眺めたときを感じる、気づける人のみ気づける小さな違和感。そこだけ、他の場所と違うという、小さいけれども、明確なその違和感。それに、気づいた。

暗闇になれた目で改めて見ると、成る程、草木で丁寧に隠された、小さな拠点があるようだ。

あれを他の国の森でやると発見は困難になるが、日本の森では逆に目立つ。この森は人の手がかなり加わった、所謂人工林のようなもの。カモフラージュどころか、違和感しかない。

「仕方がない。行くか」

鬼が出るか、蛇が出るか。それとも、竜の頭が出てくるか。

俺は夜の闇に溶けるように、移動した。

森へ入って、700メートルほどの地点。そこに、奴等の拠点があった。

拠点には8人の外国人がたむろしており、俺はその様子を木の上から眺めていた。

(リーダーは……あいつか)

1人指示を出しているやつを確認。最悪、あいつ以外皆殺しでいい。話を聞いていると、どうやら先程の楽とお嬢の姿を見ていたらしい。お嬢が第1ターゲットで、楽が第2ターゲットになったようだ。

楽……お気の毒に。

事前に防ぐつもりだけど、最悪の場合俺はお嬢を優先するからね？

なんて思いつつ、足に巻いてあるナイフポーチから、近接戦もできる丈夫な投げナイフを抜く。両手の指の間にそれぞれ4本ずつ。

そろそろ部屋にも戻らないといけない時刻が迫ってきているため、すぐに行動を開始する。一応ほかに敵がいらないか注意していたが、会話的にも気配的にも、どうやらこいつらで全員のようだ。

(リーダーと……あと副官っぽいあいつの二人だけ捕縛して、あとは殺すか)

そう決めるやいなや、行動に移す。

木から飛び降りるやいなや、一番遠いところにいる敵3人にナイフを投擲。頭に吸い込まれていくのを確認せずに、音もなく着地する。

ナイフが3人の頭に突き刺さり、3人がほぼ同タイミングで倒れるのを視界の端に捉えつつ、今度は捕縛対象以外の敵3人にナイフを投擲。すぐさま駆け出す。

リーダーの背後に音もなく、しかし素早く近づくとナイフの柄頭で後頭部を強打。意

識を刈り取る。それと同時に、投擲したナイフが3人の頭と首に見事に刺さり、崩れ落ちる。

残りの1人、副官であろう男は拳銃を抜いていたので、素早く腕に投擲。ヒット。銃を落とした隙に、一瞬で距離を詰め、側頭部を肘で殴打。意識を刈り取った。

ーかかった時間、およそ1分。驚異的な早さである。

俺は事が済むと、ほぼ止めていた息を一気に吐き出す。ナイフの回収ついでに、息のあるものがないか確認する。

6人とも見事にこと切れている。ナイフを頭や首から引き抜くと、血が溢れ出した。

……今さらのことだが、人を殺してもなにも感じない。抵抗もない。罪悪感も。

俺は携帯を取り出すと、クロードに電話を掛ける。1コール後、クロードがでた。

「優か……」

声に覇気がない。まだ自分のしでかしたことに後悔しているのだろうか。

「クロード様。ドラゴンヘッドを発見。6名を殺害し、リーダーと副官と思われる2名を無力化しました」

「場所は」

その声は、先程とは違い鋭い声音だ。

「宿泊施設より南東、約700メートルほどの森の中です。小さいですが拠点を作って

いるため、すぐに見つかるかと。また、会話を聞いていた限りこの場にいるので全員のようです」

「分かった。すぐに向かう」

電話をしてから数分、クロードが来た。

「クロード様」

「待たせたな、優……」

クロードはそう言うと、その場の惨状を見回しながらいった。

「腕をあげたな。死んでいるやつらは全員一撃。気絶してるやつも同様……か。1分もかかっていないな」

「ええ。正確な時間は分かりませんが、1分は間違いなくかかっていません」

「そうか、あとは任せろ」

「はい。あとはお願いします。私はそろそろ部屋に戻らないといけないので」

「ああ。……念のため警戒は怠るなよ。それと情報を聞き出せたらすぐに連絡する」

「はい。お願いします。それでは失礼します」

会釈程度のおじきをした後、俺は部屋に向かって駆ける。

空を見上げおおよその時間を確認……少し急いだ方が良さそうだ。

結論をいうと、何とか部屋の点呼の時間に間に合った。

気を付けていたが泥や葉っぱが付いていたのでそれを取り、返り血を浴びてないかの確認も忘れない。

部屋に帰ってからはもう一度風呂に入りー集が色々とちよつかいをかけてきて大変だったが、何とか傷を見られずにすんだー就寝時間となった。

廊下から先生の「……さーて、明日はみんなで山に行くからなく。早めに寝とけよー！」という声が聞こえる。

それを最後に、優は夢の中へと旅だった。

寝れるときに寝る。それが優の、ひいてはヒットマンの考え。



優が寝た後

「……ふすまを開けたら殺すからね」

「開けない開けない大丈夫だつて」

（……とーぜん開けるよな楽？）

(俺は疲れたから寝る)

(つれねーなー。優はどうよ?)

(……………)

(……………優?)

(……………寝たのか?)

(……………つぽいね)

(……………楽、優さつきまで起きてたよね? 早くない?)

(確かにな。疲れてたんだろ? ていうか、俺ももう寝るから)

(……………つれねーなー)

……………。

ガラ (集がふすまを開ける音)

チャ、ドス (ふすまの前でスタンバってた宮本が集の眼鏡を素早く持ち上げ、チョキの手の形で目を突く音)

プライン (集と楽がベランダに吊るされる。尚、本格的に寝ていた優はおとがめなしということで回避)

翌朝。

「……………ミノムシにでもなりたいのか?」

「助けて……」

第12話 それぞれの

ミノムシ状態の楽と集を助けた後、3人で食堂に来ていた。

「どんぶりに定食、麺類にと、結構豊富なんだな。高速のサービスエリア感が凄い」

「分かる。あつ、俺この定食にするわ」

「あ、俺もそれにする」

楽が定食を選び、集も同じものを選んだ。

俺は何を食べるかね……。

と、悩んでいると後ろから声が聞こえた。

「あ……」

振り向いてみると楽とお嬢が、少し気まずそうに見つめ合う。

まあ、クロード様の仕事とはいえ、女風呂に入ったからなあ。

「よ、よお……昨日は……」

「おはようダーリン。早くしないとご飯無くなっちゃうわよ？」

……。

「どした…夫婦喧嘩？」

「……なんじゃねえよ」

覗きだもんね。言わないけど。

というかお嬢も結構ドキドキしてたみたいだな。ご飯冷めるなら分かるけど、なくなりはないだろ。もう持つてるし。

「おい優、俺たちあつちの席にいるから、何するか決まったら来いよー」

「分かった」

何すつかなあ……。唐揚げ定食でいっか。

◇

注文をし終えて3人で朝食を食べていると、徐に集が口を開いた。

「ところで楽。お前今夜のイベントって知ってつか？」

「あ？」

「今日山から帰ってきたらよ、毎年恒例の肝試しをやるんだよ」

「肝試し？」

……そー言えば、今日行く山って昨日ドラゴンヘッドがいたところじゃん。

「だがただの肝試しじゃないぜ？　なんとくじを使って男女でペアを組まれるのだ。そしてさらに重要なルールがもう一つ……ペアになった男女は必ず手を繋がらなければならぬ!!　どうだ！　燃えてきただろう!!」

わく。どこからかパンパカパンって音が聞こえる。

「…小野寺とペアを組めるといいな？」

その集の一言に、楽の顔は赤くなる。

「バツ…そんな都合よくいくかよ！」

「俺が小野寺とのペア券引いたらいくらで買う？」

「誰が買うか！　2000円でどうだ!!？」

「手を打とう」

マンガ読んでる時も思ったけど、結構払うのね。

「優は？」

「……何が？」

「気になる子とかいないの？」

「…いないな」

「…誠士朗ちゃんのを引いたら？」

「…買うか買わないかを聞きたいなら、買わないけど」

「そう？ でも誠士朗ちゃんは喜ぶと思うけどな」

喜ぶ？ あいつが？

ないない。

「それはない。あいつ俺のこと嫌ってるからな。それよりも楽。俺が小野寺さんのペア券引いたら1500円で売ってやるよ」

「マジで!? ありがとう優!」

「ん」

「代わりと言つては何だけど、鵜のペア券が当たったらお前に譲るな!」

「いや、それはいらぬ」



千棘 side

「お嬢？ 何だか顔が赤いようですが、どうかされましたか？」

「……何でもないわよ」

全く、なんで私がドキドキしなくちゃいけないのよ。あのバカ。

「はあく。よし、もうあんな馬鹿のことは忘れましょう！ それよりも鵜!」

「な、何でしょう……」

「今日の夜何があるか知ってる？」

「？ 何かあるのですか？」

「ええ。肝試しよ肝試し！ しかも男女ペアで！」

「……肝……だめ……し？」

「そうよ肝試しよ！ しかもペアになった人とは絶対に手を？ がないといけないっていう……ちよつと鵜どうしたのよ。そんなに顔を青くして」

「……な、何のことでしょうか……ええ、私はいたって平気ですとも、お化けなんて……」

「……そういえば、あんたお化けとかそう言うのダメなんだっけ？」

「な、ななななな！ そんなことはありません。お、おとおお化けごとき、この私が退治して見せますとも！」

あたふたと慌てる鵜を見て、千棘はあつちやくと頭を抱える。

そうだった。この子お化けとかダメなんだった。すっかり忘れてた！

あつ、でも……。

「でも鵜、良かったじゃない！ 優と同じペアになったら安心じゃない！ あいつこういうの大丈夫そうだし、何とかなるわよ！」

と、励ますつもりで言った千棘だが……。

何とも微妙そうな鵜の顔を見てしまう。

「ちよ、何よその顔」

「あ、いえ…別に何でもありません」

「何でもない訳ないでしょ。何よ、何かあいつにされたの？」

「いえ、そういう訳ではないのですが…」

「？」

「えっと、近くに居づらいと言いますか…」

「え？ 何それ。今までずっと一緒にいたんじゃないの？」

「いえ。優と一緒に任務をこなす機会はほとんどなかったですね」

「そうなんだ？ ならこの機会にいろいろ話せばいいじゃない。鵜だって、他のクラスの男子よりかはあいつの方がいいでしょ？」

「それはまあ…その通りですが…」

「よし決まり！ なら私がユウとのペア券に当たったら、その時は鵜にあげるわね！」

「え、ええ！ そんな、そこまでしてくださらなくても！」

「いいのよ！ たくさん話してきなさい！」

「ちよ、そんな誤解されそうなことをそんな大声で…！！」

「「ねえねえ、それ何の話？」」

と、ニヤニヤしながらクラスメイトの女子が集まってきた。

絶対話をずつと聞いてたな!

「ほらああああああ、もおおおおおお!」

この後、鶯はクラス的女子に囲まれ、お・は・な・し☆を強制された。



宮本 side

「何だか、鶯ちゃん凄いことになってるね」

「そうね……」

小咲の声にそちらに目をやれば、なるほど。千棘ちゃんと亜実ちゃんのところへクラス的女子が集まっている。何やらこの後の肝試しのペアについて話しているようだが……。

……。

「……というわけで、あんたは何としても一条君とペアになりなさい。良いわね?」

私がそう言うと、小咲がブゴツつとお茶を拭いた。……汚いわね。

「何が『というわけ』なの…!? それになりなさいって……ペアつてくじで決めるんじゃない

……」

はあく。何を言ってるのかしらこの子は。そんなもの——

「根性で何とかしろ」

「そんな無茶な……！」

「あんたこの林間学校で何の進展もしないつもり？　どんな形にせよ、こちらから仕掛けていかなきゃ何も変わらないよ？」　「勇気」　「出すって決めたんでしょ？」

私の言葉に、小咲は少し顔を赤らめて下を向く。

全く……。

「……でも、もし私があいつとのペア券引いたらあんたに譲るから確率は2倍よ。せいぜい祈ってなさい」

「……るりちゃん」

「ペアになれたら暗がりです押し倒しちゃえばいい」

「るりちゃん!!」

親指建てるのも忘れない。

「それじゃ、私先に食器下げてくるわね」

ま、さすがに押し倒すは冗談だけだね。

でも、両思いなんだからそれで十分行けると思うけれど……。

チラッと一条君の方へ視線を向ける。なにやら2000円とか聞こえてきたけど、あつちもペア券の話をしているのかしら？

何てことを考えていると、鶴ちゃんと一緒に転校してきた転校生、弥柳優と目が合った。その後チラッと後ろ（恐らく小咲を）見て、次に一条君を見て、そして私を見て……小さく苦笑。

……何なのよ。

と思っていると、舞子君から話を振られたようで、視線が外れる。

何となく気になって小咲の方を向くと、小咲も彼と目が合ったようで一連の動作に疑問を持ったようで、首を可愛らしく傾げている。

………。

まさか弥柳君。小咲のことが好きだったり……？ いや、それはないか。あの感じは好きというよりかは……「大変だね」とでも言いたげな表情だった。

どうやら弥柳君はある程度察したらしい。協力してくれるなら、ありがたいわね。

良かったわね小咲。一条君とペアになれる確率は、思ったよりも高そうよ？

第13話 銃声と血

「よーし、全員注目！ これより恒例の肝試し大会を開始する！！ 準備はいいか野郎どもー！！」

夜の森に、先生の声が響き渡り、それに答えるように、特に男子生徒から「おおー！！！！」という声があがった。

何というか、ノリいいなこの学校の人たち。

ーーと思つたのもつかの間、

「ーーじゃあ先生たちはここでいつぱいやつてるんで、生徒の自主性を重んじて？ 後はテキトーに上手くやつてくれ」

といつて、ビール片手に行つてしまった。

楽が何とも言えない顔でみていて、それを見てちよつと苦笑した。

なんて考えながらぼーっとしていると早速女子からぐじが始まつた。

そしてついに、俺たち男子が引くばんになる。

「ゴホンゴホンあーゴホン！ へー小咲は12番だつたんだー 小咲はー12番ー」
…宮本さん、あからさま過ぎますよ。

「おつす優！」

「…集か、どうかしたか？」

「うんにや、ただ優が12番を引いた時、どうするのかなくって思つて、聴きにきた」

「？ それなら朝にも行つたけど、楽に譲るぞ？ まあでも、その必要はないみたいだけどな」

「それはまたどして？」

「ほら」

集がおれを指さした方に視線を向ける。

そこには12番を引いて空いた口がふさがらない状態の楽と、激しく宮本さんを揺する小野寺さんの姿があつた。

「お、楽12番引けたのか。さつすが楽、もつてるね」

「確かにな。そういう星の下に生まれたんだらう。それより、引いてきたらどうだ？」

「そうするよ。優も行こうぜ」

集のその言葉に軽く返事をして、集の後ろについていきくじを引く。俺の番号は10番。原作通りならお嬢と集、鶴に宮本さんのペアになるけど、今回は俺がいるから男子の数も足りてるだらうし…どうなるんだらう？

「……え、何でここだけ3人ペア？」

「知らないわよ」

「女子が人数1人多くて余ってしまわなくて、もう3人でいいやとなったらしくて」

あー、成る程ね。確かに人数足りていたところに俺というもう1人が入ったら、そりゃこうなるわな。

「なるほどね。納得したわ。でもこの場合、手はどうやって結びばいいのかしら？」

「えつと……この時は男子が真ん中で女子がそれぞれ両手をつなぐということになってるみたいです」

「……え？ 俺が真ん中？」

俺が聞き返すと、鵜は小さく頷く。

「いや、別に鵜と宮本さんで手を結びばいいんじゃないのか？ 俺はその後ろか前にいるし」

鵜は俺のことがあんまり好きではないから、そう提案したのだが……。

「し、ししし仕方がないだろう。そういうルールなのだからここはそうすべきだ。ほら、早く間に入って来い」

なんて言い出した。

チラッと宮本さんを見れば、小さく頷いてくる。

「10番のペアの方へ、そろそろ準備お願いしまーす」

その声に、渋々間に入り、2人の手を握るのであった。

周りからの視線を背中に感じつつ、森へ進む。時折、「何であそこ3人なの？」という純粹な疑問から、「両手に花かよ、羨ましい」「一条の野郎も許せんが、あいつも許せん」な。「その通りだな。我が同土」という声も聞こえてきた。

そんな声を聞き流しつつ、森の中に入ること数分。鶯はもう怖いのか、俺の腕に抱きついてきており、宮本さんも少し怖いのか、心なし方を握る力が先ほどよりも強くなっている。

そしてー

「ギャオオオオオオ!!」「ヒイイイイイイ!!」

木陰から突然出てきたゾンビ（メイクの実行委員）にガチビビリした鶯が容赦なく腕に抱きつく。

ちよ、力強。地味に痛い。

「ちよ、落ち着け鶯…」

「すすすすまない…!! 私、こういうの全然ダメで…」

まあ確かに痛い、腕にあたる二つの大きくて柔らかい二つのものがあたるので、まあ役得といえれば役得である。これくらいは我慢しよう。

ちなみに宮本さんは、ゾンビが出てきた瞬間は少しビクツとしていたが、鵜の慌てように逆に落ち着いたようで、今は同情めいたまで俺を見てくる。

宮本さん、そんな目を向けるなら助けてください。

と、考えていると俺たちとゾンビの間を楽が走り去った。

「え……」

「今のは……」

「楽……だな……」

とゾンビとともに固まっていると、

「……ギャ、キヤオオオオオ!」

「ヒイヒイヒイヒイ!」

ゾンビさんが慌てて脅してきた。

「ははは、はやく、次に行くぞぞぞぞぞ!」

といって、鵜が俺の腕を抱きしめたまま走り出し、俺はそれに引つ張られるように走り、宮本さんも俺にひかれるような形で走り出した。

ある程度進んだところで鵜が走るのをやめた。よほど怖かったのか、息がすごいあ

がっている。

「あい鵜大丈夫か？　ちよつと休憩するか？」

俺の声に反応して、俺を見る鵜。

その時、やつと今の状態に気がついたのか、自分が抱きしめている腕と俺の顔を見比べて…。

「わ、わわわ私に触れるなー!!？」

「ひでぶっ！」

と言いながら、俺の顎に一発かまして宮本さんの空いている左手を握りにいった。

「お、おまえ、いくらなんでも顎に一発入れなくてもいいだろう…」

「ううううるさい黙れ！」

俺が顎を撫でていると、宮本さんから哀れみのこもった目を向けられた。やめて、そんな目で見ないで…。

ーと、その時

『ピリリリリリリリリ！』

と、俺の携帯が鳴った。

鵜は突然の音にまた悲鳴を上げたが、俺はそれどころではなかった。何故ならその音は、クロード様から緊急事態が起こったとこにしかない音だったからだ。

俺はすぐさま電話に出る。

「はい」

「私だ！ おまえが捉えた2人を尋問したんだがまだ2人程仲間が付近にいるらしい！

狙いはお嬢だ！ 今すぐお嬢の安全を確保し護衛しろ！」

俺はクロード様に返事をする事なくすぐに電話を切り、宮本さんの手を離してすぐに駆け出す。

俺の突然の行動に鶴と宮本さんが慌てて後ろから声をかけてくるが、返事をする時間すら欲しい。

肝試しということで気配を探っていなかったがすぐに周囲の気配を探りーーいた。

すぐさま移動を開始し、隠し持っていたナイフを取り出す。

視界に捉えた。

その一瞬で状況を判断する。楽は鳩尾を食らったのか蹲り、1人のガタイのいい男がその頭を踏みつけていて、もう1人の男がサプレッサーのついたハンドガンを機に寄るかかって座り込んで怯えているお嬢に、その銃口を向けている。

カッター体が熱くなる。

指は今まさに引き金を引こうとしている。

銃を叩き落とす？ ダメだ。間に合わない。

ならー、

ーパシユツというサプレッサー特有の銃声がし、赤い血が散った。

第14話 目は口ほどに

——パシユツというサブレッツサー特有の銃声が、耳に入るとほぼ同時、お嬢の前に飛び出して庇った左手に、激しい痛みが襲う。

パツと散った血が体操服に着くが、それを無視し、一気に踏み込んでナイフを銃を持つている男のど元に突き刺す。それと同時に、ナイフは刺したまま放置して飛び出し相手の背後に回り、首を絞める。そこまでして背後からナイフを刺した男が倒れる音を聞き、それを聞き届けると同時に、絞めている首を、何一つ躊躇することなく折った。ゴキツという骨の折れる生々しい音が鳴り、首があらぬ方向に曲がった死体は、やけにゆつくりとその場に崩れ落ちた。

——二人、殺した。

しかし、もうこの心は、波風一つ立ててはくれない。

「お、お前……」

楽がうつ伏せに倒れたまま、俺を見上げてくる。視線を楽の方に向けると、楽の体がびくりと跳ねた。その目に映るのは……確かな恐怖。それも、今横で転がっている死体に対してではなく、明らかに俺に向けられた恐怖と——嫌悪感だった。

(まあ、目の前で知り合いが人を殺したら、こんな目にもなるか)

そんな、どこか楽観的な思考をする中で、ふと、自分は今、どんな表情を、どんな目をしているんだろうと、気になった。たぶん、何にも映さない、暗く死んだ目、という目をしているんだろう。

何はともあれ、まだ警戒を続けなくてはならない。クロード様の話では敵は2人だけの筈だが、捕えたやつが嘘をついていないとも限らない。すぐに周囲の気配を探る。

気配から見て、突然なつた小さな音が聞こえた者たちは少しばかり周囲をキョロキョロと確認した後、何事もなく肝試しを再開した。それ以外のお化け役も、何の音だろうと首を傾げつつもその場を離れることなく過ごしている。そして——こちらに向かつて走ってきている人物が2人。気配からして鶴と宮本さんだ。

鶴にもさっきの銃声は聞こえたらしく、それがサプレッサーの音だと分かったのだろう。宮本さんを守るように周囲を警戒しつつ、こちらに走って向かってきている。

それ以外に学生以外の気配は——ない。どうやら本当に2人だけだったようだ。

俺は軽く息を吐き出し、戦闘態勢を軽く解く。完全に解かないのは、俺以上の手練れがいて、まだ気配を立てて隠れているかもしれないからだ。

クルツと振り返り、お嬢の姿を確認する。目立った外傷はないようだ。良かった。怖かったのだろう。未だ呆然と体を硬直させている。

俺は動けないお嬢に手を貸そうと近づき、目の前にしやがみ込んで顔色を窺う。この顔色を、土気色：と表現すればいいのだろうか。

「お嬢、大丈夫でしたか？」

そう言つて、手を差し出し――

パシッッ！

と、差し出した手が、強く叩かれた。

そして、

「ヒッ！……、来ないでよ！……この人殺し!!!」

恐怖に震わした身体を何とか動かし、少しでも俺から距離を取ろうともがく。そしてその目は――化け物を見る目だった。



side 鵜

優がいきなり走り出したと思つたら、次の時には銃声が聞こえた。隣にいる宮本様はこの音が何の音か分からず、「何の音？」と首を傾げているが、この音は間違いない。サプレッサー特有の銃声だ。

それを理解した瞬間私はすぐさま走り出した。後ろから宮本様の「ちよつと!」という声が聞こえたが、それを無視して——いや待て。もしかしたら、まで敵がいるかもしれない。もしいたとしたら、お嬢と友人である宮本様を一人にするのは危険か——。仕方ない。

「宮本様! 急いでください!」

私はすぐさま宮本様の手を取って走りだす。もちろん周囲の警戒は怠らない。

「ちよ、ちよつと待って鶴さん! 突然どうしたのよ!」

「説明している時間はありません! とにかく、私と一緒に来てください!」

今すぐにもお嬢の元に駆けだしたい気持ち胸の奥に押し込んで、銃声が聞こえた方向へ走る。

少しして、このあたりだと考えられるところまでたどり着いたとき、視界の端に、お嬢を捉えた。

良かった、無事だ。そう安堵して、お嬢の側に行こうと一歩踏み込んだその時。

「……—ないですよ! この人殺し!!!」

お嬢のその声に、足が止まった。

お嬢の視線は、目の前の男に向けられている。片膝をついて、手をお嬢に差し出したまま硬直しているその男——御柳優。

さつと周囲を見渡すと、一人は咽喉からナイフを生やし、ビクンビクンと時折身体が動いている死体があり、もう一つ、一条楽の側に横たわる、首があらぬ方向に曲がった死体があつた。

別に死体を見たのは、これが初めてではない。私が直接殺したことはないが、私が怒りで我を忘れたあの時、人を殺しそうになつた時さつそうと現れては、私が制圧しかけていた組織をほぼ皆殺しにした。

その時の光景を思い出していると、お嬢が私に気づいたのか私の名を叫んで這うように私の足元まで来て、足に抱き着いた。

「鶯！ 良かった！ 助けて！」

そう言つて私の足にすがつて涙を流すお嬢を、私はただ眺めることしかできなかつた。私の後ろで宮本様が口元を抑えて蹲っていることにも気づかず、私はゆつくりと立ち上がる男から目が離せない。

そして、その目を見る。

——あの時の目だ。

あの時の、お嬢にちよつかいを出した組織を、私が怒りに任せて攻撃した時、何処か

らともなく現れては、まるでお前が手を下す必要はないとばかりに皆殺しにしていた、あの時の目だ。

何の感情も映さない、真つ黒な目。殺意も、後悔も、嘆きも、同情も、何の感情も、読み取ることができない。

その目は、まるでお前など必要ないと語っているようで。

その目は、まるで隣に立つのを一切拒むようで。

その目は、まるでお前はこんなふうにならなくてもいいんだよって、目の奥に僅かな優しさがあるようで。

——ああ、やはり、私はこの男が嫌いだ。

そう、思った。

◇

お嬢に人殺しと言われた。その言葉に俺は——特に傷つくこともなく、そうですがそれが？ という感想を持った。

……俺はもう色んな意味で末期かもしれない。

正直、もう人を殺しすぎて、自分が人殺しであることは理解してるし、恐らく死んだ

ら地獄に落ちるか、次の生は人ではない何かだろうという風に考えている。

だからたとえお嬢に人殺し！　と言われても……うん、そうですね？　今あなたの目の前で殺してるんですから、当然ですよ？　って感じ。

そこにお嬢を守るためにしかたがなかったんだ！　とか、どうして分かってくれないんだ！　とかそういう怒りは全くない。ただ感じるのは、お嬢が無事でよかったというこの一点のみ。無力感も、後悔も、懺悔も、怒りも、本当に、何も感じない。

…あれ？　これ俺洗脳されてね？

まあされてようがされてまい別にどうでもいいんだけど……。この状況どうしたものか。

お嬢は鵜の足にすがってるし、鵜は固まってるし、宮本さんは嘔吐しかけてるし（ごめんね）、楽も動かない。

…どうしろと？

取り敢えず、死体をこのまま放置しておくわけにもいかないし、死体をもつてクロード様と合流するか。

そう決めると、まずのどに突き刺したままだったナイフを抜き、血をふき取る。ナイフの抜くとき、肉を裂く音がして楽が顔を青くさせ口元を抑え、宮本さんはいに決壊した。

それを右肩に担ぐ湯に乗せた後、首を折って殺した男を足で蹴って浮かせ、その瞬間を逃さずに首元の服を掴んで引きずって森の奥に行く。

優の足音と死体を引きずる音しか聞こえない中で、俺は鶯にお嬢のことを頼む。

「鶯、後は任せた」

それだけ言って、優はクロード様と合流するために、死体を運んだ。

左手は、自身の血でそのほとんどが真っ赤だった。